

特集

1 研究授業を
活性化させる!

2

対談

「研究授業は役立つ」という実感が
負担感をやりがいに変える東京都文京区立音羽中学校 大塚 悟 教諭
静岡県駿東郡清水町立南中学校 川合雅哉 教諭

6

学校事例 1

授業案も事後研究会も不要な
「授業公開」から研修を活性化香川県丸亀市立飯山^{はんざん}中学校

10

学校事例 2

ワークショップやペアワークで
参加意識が高まる研究授業に山形県山形市立高^{たかだて}楯中学校

14

学校事例 3

教科共通のテーマを設定し
グループワークで負担を平準化

岡山県岡山市立福浜中学校

連載

20

ベネッセのデータでみる子どもと教育

学習習慣・学習意欲

24

課題にフォーカス

職場体験をより効果的な実践にするためには

現状

さまざまな課題がある中で手間と時間を掛けて職場体験を実施

学校事例

「つながり」を意識した職場体験が学習意欲の向上に結び付く

宮城県仙台市立寺岡中学校

30

家庭学習 指導のひとさじ

教師の手の内を明かした
「学習ガイド」で学習意欲を育む

京都府長岡京市立長岡中学校

32

読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて
取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます



事前検討会では研究グループ全員で指導案を作成する
(岡山県・岡山市立福浜中学校)

特集

研究授業を 活性化させる!



事後研究会では全体協議の前に
ペアで意見や感想を話し合う
(山形県・山形市立高橋中学校)

「前向きに取り組みにくい」
という声がよく聞かれる研究授業。
多忙な中でも無理なく続けられ、
多くの先生にとって
役立つ研究授業とするための工夫を、
現職の先生の対談と
3校の実践事例を通して考える。

「研究授業は役立つ」という実感が負担感をやりがいに変える

研究授業の必要性を感じながらも、効果的に取り組むのが難しいのはなぜか。現場が抱える課題と改善の方向性について、研究を統括する立場の教師と、若手のリーダー的な立場にある教師に聞いた。

課題

授業、生徒指導、部活動指導 研究の前に立ち足はだかる多忙感

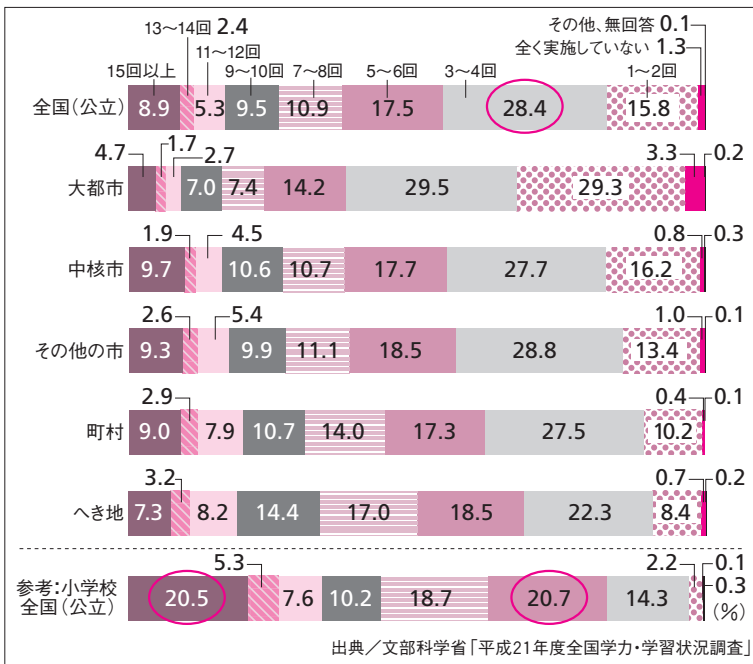
「授業力の向上は必要だと思うが、そのために研究授業をすることには乗り気でない」という声をよく耳にします。文部科学省の調査結果(図1)でも、「授業研究を伴う校内研修の実施回数」は年3、4回が多く、小学校の平均回数よりも少ないという結果が出ています。こうした状況をどのようにお考えですか。

川合 教師は、何よりも「授業」を大事にすべきだと思います。研究授業を通じて学んだことを実際に試して、生徒の反応が良かったりなどは、研究授業を行って良かったと思います。ただ、とにかく忙しく、研究授業を行

う時間の確保が難しいことが最大の課題です。勤務校では、4人ほどのグループに分かれ、メンバー全員が年1回ずつの公開授業を行い、メンバーの授業は必ず見学するようにしています。また、学校全体での研究授業が年3回ほどあります。担当教科が理科なので実験の準備に時間が掛かることや、生徒指導や部活動指導などもあることから、正直なところ、「研究授業どころではない」と思ってしまう時もあります。

大塚 忙しさが研究授業のハードルになっていることは、私の勤務校も同じです。2009年

図1 中学校における授業研究を伴う校内研修の年間実施回数



度に2校が統合して開校した新設校のため、今年度は特に時間の余裕がありませんでした。授業時数の増加など、新課程への対応もあります。学校全体の動きを見ながら、いかに研究授業の時間をひねり出すかは、今後ますます難しい課題になりそうです。小学校と比較して中学校で研究授業があまり盛んでない要因には、教科の壁も挙げられます。「他教科の授業を見ても参考にならない」と考える教師は相当数いるのではないのでしょうか。

川合 自分の経験に照らし合わせても、同じ

研究授業を活性化させる!



東京都文京区立音羽中学校

大塚 悟

おおつか さとる ◎教職歴30年。教務主幹。技術科担当。「研究授業を通して、教科を超えた指導方法の改善と新しい情報の収集を心掛けています。最近の関心事はICTの活用です」

教科の授業を見る方が、すぐに役立つことが得られやすいのは事実です。授業スタイルが固まっている若手教師は、まず担当教科の授業を中心に見た方が良いかもしれません。しかし、ある程度経験を積んできたなら、積極的に他教科の授業を見学して、視点を変えることも必要ではないでしょうか。他教科の授業でも、自分の指導に生かせることはありますし、それを探すこと自体が授業を工夫する力になると思います。

大塚 団塊の世代が大量退職していますから、若手教師の指導力を高めることは大きな課題ですね。研究授業は、新卒採用の教師に大学や初任者研修では学べないことを指導する大切な機会です。例えば、新卒採用の教師は評

価方法について学ぶ機会がほとんどありません。なるべく早い時期に、研究授業などを利用して指導すべきです。

川合 評価の仕方を正しく理解していないと、大きなミスを犯しかねません。目立つ子よりも、おとなしくて目立たない子の評価を低いしがちにするなど、経験が浅いと陥りやすいことは沢山あります。

大塚 ただ、研究授業が必要なのは、若手教師だけではありません。経験が豊富な分、「今の指導法で大丈夫」と考える教師がベテランほど多いようです。しかし、教職歴にかかわらず、自ら勉強する機会をつくり指導力を高めたいかなければ、時代の流れに取り残されてしまいます。



静岡県駿東郡清水町立南中学校

川合 雅哉

かわい まさや ◎教職歴12年。学習指導部長。理科担当。「研究授業は、多くの教師の考えに接して発想を転換できる機会になっています」

普段から授業を見合う文化をいかにつくり出すか

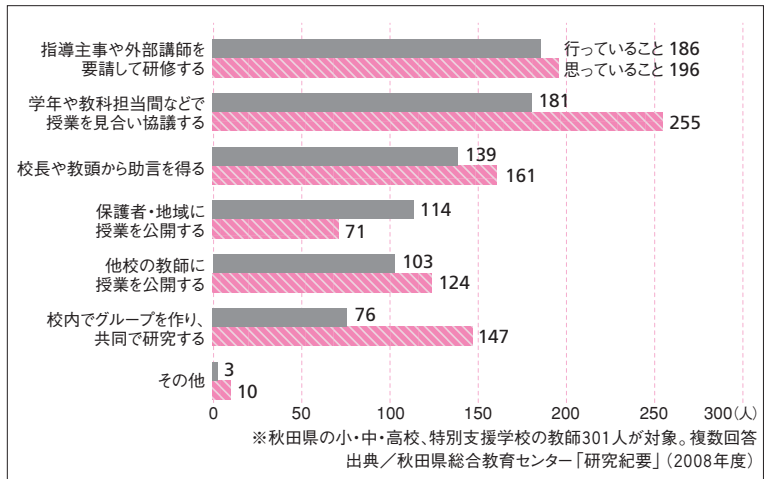
——研究授業にはいろいろな方法があります。授業を見合うことは多くの先生が効果的とお考えのようです（P.4図2）。具体的な効果や、逆に陥りがちな問題にはどのようなことが挙げられますか。

川合 一人でも多くの生徒が「楽しい」「分かった」と感じる授業を目指して、自分では考え抜いた授業を行ったとしても、研究授業後の検討会で他の先生に意見を聞くと、まだまだ改善の余地があることにいつも気付かされます。こうした学びはOJTならではのようです。

大塚 先ほど、生徒指導などで時間が無いというお話がありました。確かに、生徒指導において緊急性の高い課題がある場合、研究授業よりも優先すべきでしょう。しかし、長い目で見れば「授業が分からないから、生徒が荒れている」ということもあります。すべてが必ずしも当てはまるわけではありませんが、学校全体として「授業力の向上で生徒を変えよう」という視点を忘れてはならないと思います。

川合 研究授業で陥りがちなのは、気合を入れ過ぎて普段とは全く異なる授業をしてしまいうことです。なるべく良い授業を見てもらいたい気持ちは分かります。しかし、準備に

図2 授業研究を充実させるために効果的なこと



時間を掛け過ぎた授業は、本人にとってはその場限りのものになってしまっていますし、他の教師にも参考にはなりにくいものです。私は、準備に過度な時間を費やすより、「このようなアイデアがあります」という発想を見せるように心掛けています。授業を見る側と見られる側の双方の立場で、「発想の転換」を図れることが、研究授業ならではの良さではないでしょうか。

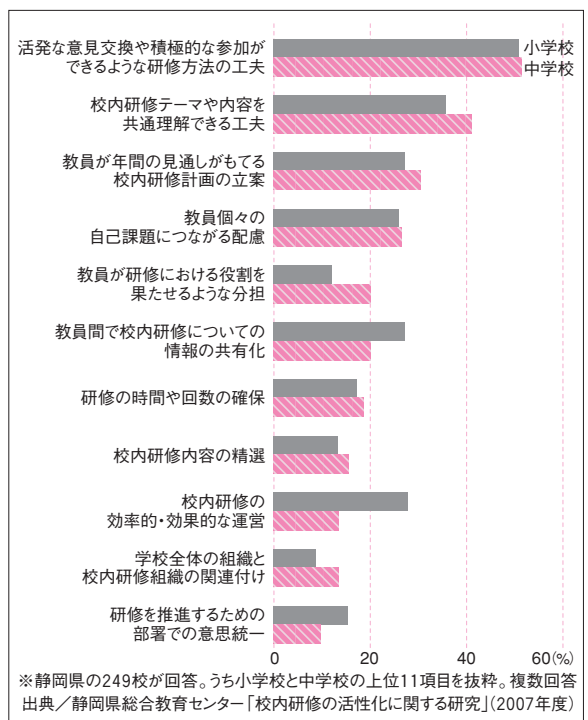
大塚 そうした磨き合いは、研究発表会のような特別な場だけでなく、日々の授業を通して

て行うことが出来るのが理想ですね。本校の校長は、普段から授業を見て回り、子どもの様子を中心に、授業をデジタルカメラで記録しています。おかげで、どの教師も他の授業に気軽に入れる雰囲気があります。私も、若手教師の授業を見学してアドバイスをすることがよくあります。

川合 私の勤務校も職員室などで気軽に授業について話し合う雰囲気があります。勝負は教室の授業でも、そのために必要なのは、気軽に尋ねたりアドバイスをしたりする、教室外のコミュニケーションです。

大塚 そうですね。実際には、その時間なかなか作れないほど、皆、忙しいのが悩みでもあります。研究授業は1コマの授業で終わりではなく、指導案作りや事前事後の研究会にも時間が必要です。そこで、統合前の学校では、少しでも負担を軽減しようと、指導案がない研究授業を行っていました。その日の授業の工夫や改善ポイントだけを書いた用紙を教師全員に配布しておき、その時間が空いていけば見学してコメントを記入するという方法です。授業後に回収した用紙をコピーして、次の研修会で配布し、話し合いの材料と

図3 研修主任が考える校内研修の改善点



していました。

川合 勤務校では、研究授業の担当者が事前研修指導部と話し合い、指導案を作成します。勉強にはなりますが、かなりの時間を要する視点で、研究授業の流れを見直すことが必要ではないかと思っています。

大塚 本校は生徒数約2000人の小規模校です。私の専門は技術科ですが、技術・家庭科の担当は講師を含めて二人と、校内だけで教科の研究を進めるのは難しいものがあります。また、先生方に空き時間が無く、他の先生の授業を見たくてもなかなか見られません。地域によっては、他教科でも同様の課題が生じている学校は多いのではないのでしょうか。

研究授業を活性化させる!

工夫

行事や会議を精選し 研究授業を年間計画に組み込む

— 研究授業をより良いものにするために、さまざまな工夫の観点がありませんか。(図3)。

お二人はどのようにお考えになりますか。

大塚 「時間が空いたらしよう」というのは、結局、実施しなかったり、教師間で取り組みの積極さや負荷に差が出やすいものです。最終的には、トップダウンの判断の下、あらかじめ年間計画に組み込んでおくことが重要です。計画性を持たせれば、何とか時間を作ろうという意識が教師に芽生えます。

川合 地域や保護者との円滑な関係構築や、「〇〇教育」といわれる新しい教育課題など、今の教師に求められていることは非常に多いと感じます。すべてを完全にこなそうとすると広く浅くなり、どれもうまくいかなくなり

ます。管理職の先生には、自校の実態を踏まえて取り組みに優先順位を付け、力を集中できる環境を整えていただきたいです。

大塚 本校では、会議や行事を精選して、その時間を研究授業に充てています。例えば、事務連絡は朝会で伝えることにして、職員会議は月1回に減らしました。協議内容はあらかじめプリントにまとめて配布し、会議では議論に集中して、時間を短縮しています。

川合 研究テーマを絞ることも大切ではないでしょうか。研究が進むと、「これも入れたい、あれも入れたい」といった要望が挙がり、つい詰め込みがちになります。そうすると、研究の焦点がぼやけてしまいますし、授業者の指導案づくりも大変になります。

大塚 確かに、研究テーマの設定は慎重に行うべきです。本校では、生徒の実態を反映させるため、毎年1月に教師全員にアンケートを取り、次年度の研究テーマを決めています。

参考ウェブサイト(組織名50音順)

※下記はあくまでも一例です。他にも多くの教育委員会・教育センターのウェブサイトにさまざまな研究紀要や実践例が掲載されていますので、ご参照ください

●秋田県総合教育センター「研究紀要」
<http://www.akita-c.ed.jp/~ckyk/kenkyu/h20/pr1/mokuji.html>

図2で紹介したデータの他、授業研究会での司会進行の例や授業研究の方法のチェックシート(「授業研究デザインシート」)など、取り入れやすい具体例を掲載

●岩手県立総合教育センター
(研究成果の紹介)
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/kyouka/seika/jugyouken/>

「研究授業の考え方」「ワークショップ型研究会」「授業力アップ・ポートフォリオ」などへの取り組み方を紹介したガイドブックを掲載。図版やイラスト入りで読みやすい

●香川県教育センター
<http://www.kec.kagawa-edu.jp/>

「コーチング」「評価」など複数のテーマで校内研修の実践ポイントを掲載。実態・意識の各調査結果や、ダウンロード可能なサポートツールもある

●国立教育政策研究所(調査結果資料)
http://www.nier.go.jp/09chousakekka/05chuu_chousakekka_shiryou.htm

平成21年度全国学力・学習状況調査結果(学校質問紙)の中に、図1で紹介したデータを含む授業に関する調査結果を掲載。人口規模別や学校段階別に分かる

●静岡県総合教育センター「研究紀要」
http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/index.php?action=pages_view_main&page_id=42

図3で紹介したデータを始め、研修主任、一般教諭など立場別のアンケート結果が豊富。その他、コミュニケーションを活性化する視点からの研究結果などを掲載

研究授業の課題と改善の方向性

課題

- ・研究授業を行う時間の確保
- ・教科間の壁
- ・授業者の負担
- ・教師数の少なさによる研究の深まり不足

改善の方向性

- ・「授業力の向上で生徒を変える」視点
- ・研究授業を年間計画に組み込む
- ・役立ち感を得られるテーマの設定
- ・研究授業以外での広がりを持たせる

川合 校内の声を広く取り入れるのは良いですね。「この研究は役立ちそうだ」という実感があると主体的に取り組むことが出来、心理的な負担も軽くなります。管理職や研究主任がテーマを一方的に決めるのではなく、現場の教師が課題と感じたり、関心のあるテーマを取り上げたりするのが良いと思います。

大塚 指導力向上という研究授業の本来の目的に立ち返ると、特別に時間を設けなくても出来ることが見えてきます。例えば、研究テーマに「生徒同士のかかわり合い」を掲げた時、授業でいきなりグループ学習を取り入れてもうまくいきません。帰りの学活など、普段からグループでの話し合いに慣れさせることから始めると、授業でのグループ学習は比較的スムーズに進みます。土台を作った上で研究を進める視点も大切だと思います。

授業案も事後研究会も不要な 「授業公開」から研修を活性化

香川県 丸亀市立飯山中学校

はんざん

丸亀市立飯山中学校は、時間や労力の負担を減らすため、普段の授業をそのまま公開することから校内研修をスタート。教師が授業を見せ合うことにまず慣れてから学校全体で取り組みを始め、効果を上げている。

課題

- 学校全体での研修がなく、教師間で授業に対する意識が共有されていなかった
- 授業改善の取り組みが、個々の教師に任されていた
- 教師の平均年齢が上昇。研修を通して新たな教育課題に対応する必要があった

実践

1 普段の「授業公開」

- すべての教師が年1回、普段の授業を公開、他の教師の授業を年2回以上参観する
- 負担軽減のため、指導案や事後研修は省略。簡単な報告書を現職教育主任（香川県内での研究主任の呼称）に提出するだけでよい
- 授業を見る際は「生徒の視点」を大切にし、教科特性に固執しない

2 学校全体での「研究授業」

- 学校全体での研究授業を年2回実施
- 外部講師を招いてレベルアップを図る

3 校内研修会を年間指導計画に組み込む

- 月1回、部活動の休みを設け、校内研修会の時間を確保。「研究授業」もこの時間枠で実施
- 授業評価アンケートの結果を共有するなど、共通の授業像の形成の場とする

成果

- 他の教師に授業を見せることへの抵抗感がなくなった
- 授業を見せ合い、指導改善を重ねるという「学び合い」の意識が定着
- 具体的な授業改善案が職員室で日常的に話し合われるようになった

School Data

◎1953(昭和28)年開校。教育目標は「自主・自律の心をはぐむ」。近年、学区は坂出市や丸亀市のベッドタウンとして発展し、田園地帯と新興住宅地が混在、生徒数が増えている。2006年度に全国中学校軟式野球大会で準優勝するなど、部活動が盛ん。



校長◎大西孝司先生 生徒数◎535人

学級数◎16学級(うち特別支援学級1)

所在地◎〒762-0082 香川県丸亀市飯山町川原1110

TEL◎0877-98-2027

URL◎<http://www.hanzan-jh.ed.jp/>

研究授業を活性化させる!

校内研修を導入し 授業の視点を共有

飯山中学校が「新たな発見と感動のある授業づくり」を目指して校内研修に取り組み始めたのは、2006年度のこと。同年に赴任した大西孝司校長は、一人ひとりの教師は熱心に授業に取り組んでいたが、互いに学び合う仕組みが整っていないことに組織的な弱さを感じたという。

当時の校内研修は、学校全体ではなく、学習指導や生徒指導、人権教育といった部会ごと

に実施しており、教師全員が参加する研修はなかった。また、「授業」をテーマとする研修もなく、授業改善への取り組みは個々の教師に任されていた。

教師の高齢化も、大西校長が校内研修の必要性を感じた理由の一つだ。同校の教師は50代が最も多く、20代が少ない上に、年々、平均年齢が上昇していた。

「子どもの実態は急速に変わっています。5年前は評価された授業でも、今は通用しないこともあります。経験に頼りがちなベテラン教師も『これまでの指導で大丈夫だろう』という意識を捨て、研修を通して新たな教育課題への対処法を学ぶべきです」

また、市町村合併により、以前に比べて広い地域から教師が集まるようになった。教師の教育観が多様化している中、大西校長はす

べての教師にとって共通項である「授業」を中心にした校内研修の活性化を検討した。しかし、多忙な業務の中で本格的な研究授業を行うのはハードルが高い。そこで導入したが、特別な準備や事後研究は行わず、普段の授業を公開し、空き時間の教師が参観する「公開授業」だ（P.8）。これにより、次第に授業を見せ合う意識が根付き、07年度からは「公開授業」と並行して、年2回の本格的な研究授業が実現した（P.9）。

教師の意識が変わり 「学び合い」の文化が浸透

大西校長が校内研修の仕組みづくりと同時に力を入れたのは、教師の意識改革だ。

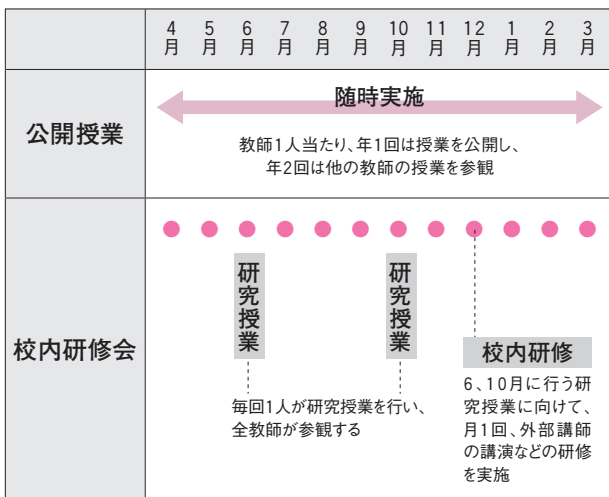
「比較的、成果の見えやすい部活動の指導は、多忙な教師でも一生懸命に取り組みます。研究授業の負担が大きいのは確かですが、授業改善のための最も有効な手段であることを繰り返し話し、やりがいを感じてもらえるように努めました」（大西校長）

3年間の取り組みを通し、教師の意識は着実に変わりつつある。まず、「学び合い」の文化が浸透し、職員室などで日常的に授業改善について話し合われるようになった。研究を通して、教師間に共通の授業像が出来たため、話し合いの内容は非常に具体的になった。例えば、定期考査などの成績が悪かった時、以前は「学習意欲が足りない」と生徒側の要

因に目を向ける傾向があったが、今では「自分の授業には何が足りないのか」と、指導への問題意識を持つ教師が増えたと。更に、教科ごとの部会が必要に応じて自主的に開かれることも増えた。

授業改善への意識も全体的に向上している。「現在は校内の基盤がようやく整った段階。公開授業によって学び合いが定着したため、今後は研究授業の比重を高めて校内研修を充実させていきます」（大西校長）

飯山中学校の研究授業の流れ



丸亀市立飯山中学校校長
大西 孝司 Onishi Takashi

1 授業を見せ合い、教師同士が高め合う意識を育てる

■指導案も事後研修も省略し負担を軽減

教師同士の学び合いを無理なく進めるために、まずは普段の授業を公開する「公開授業」を始めた。06年度から、すべての教師が年1回以上、自分の授業を公開し、年2回以上は空き時間に他の教師の公開授業を参観する。公開の日は1週間ほど前までに現職教育主任に申告し、職員室のホワイトボードで全員に伝える。指導案は作成しなくて良いことにし、事後研修も省略した。代わりに、授業者は事前に授業の工夫点を書いた用紙(図1)を現職教育主任に提出。用紙には参観者が意見や感想を書く欄を設け、授業者にフィードバックできるようにしている。授業後、授業者や参観者が短時間で話し合うこともあるが、これも任意だ。

「理想を言えば、指導案を作り、事後研修を行う方が効果は大きいでしょう。しかし、負担が大きいため回数が減るよりも、効果が多少低下しても教師全員が授業を公開する方が良いと判断しました。あくまでも、一人ひとりの授業力を高めるのが目的だからです」(大西校長)

研究授業ではなく、「公開授業をしよう」

と呼び掛けることで、教師が感じる心理的なハードルも下げることが出来たという。

■生徒の目線で公開授業を見る

普段の授業だからこそ得られる利点も大きい。改まった研究授業では「良い授業を見せたい」という気持ちが働き、通常とは異なる授業を行いがちだ。そのような授業は、準備が大変な上に指導改善には結び付きにくい。あまり効果がなく、結果として校内の研究意欲を停滞させてしまうこともある。

「効果を実感することは、校内研修を無理なく継続するポイントとなります。そのためにも、普段通りの授業を見せ合うべきです」(大西校長)

中学校で研究授業が広まらない要因の一つに、教科の壁があるとよく言われる。しかし、大西校長は、その考えは必ずしも障害にはならないと考える。

「『他教科の指導内容は分からない』というのは、教師目線で授業を見ているからです。授業を受けるのは生徒ですから、公開授業は『生徒になったつもりで見て欲しい』と、先生方に話しています」

自分がこの授業を受けたとしたら、分かり

やすいと感じるか、学習意欲がわくか、驚きや気付きはあったか、教師はそうした視点で授業を見て、意見や感想を伝えることにしている。そのため、教科関連よりも、「発言の取り上げ方が良かった」など指導技術や子どもの様子について多く取り上げられるという。今後も公開授業は継続する考えだ。最終的には公開する授業を決めず、どの授業を誰が見学しても良いという自由な雰囲気は校内につくり上げて行くことが目標だという。

図1 公開授業後の報告書

氏名	性別	所属	学年	担当	出席
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
19					
20					
21					
22					
23					
24					
25					
26					
27					
28					
29					
30					
31					
32					
33					
34					
35					
36					
37					
38					
39					
40					
41					
42					
43					
44					
45					
46					
47					
48					
49					
50					

公開授業の前に授業者が工夫点を記入。下欄に参観者が感想を書き込む。現職教育主任が回収し、校内研修会で授業改善について話し合う際の資料となる



このシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。
<http://view21.jp/c9411/>

研究授業を活性化させる!

2 外部講師を招いた年2回の研究授業

■事後研修に外部講師を招く

取り組み2年目の07年度には、教師が公開授業に慣れてきたところで、年2回の研究授業を始めた。公開授業とは明確に役割を分け、学校としての「理想の授業」の追究や、教師の意識の共有を目的として、毎年、共通テーマを設定して進めている。

毎回一人が授業を担当し、教師全員が参観。事前に指導案を作成し、授業後は1時間の事後研修を行う。授業者は若手教師が選ばれることが多い。普段は5限目で終了する月曜日

の6限目に当たる時間に実施し、授業を受ける生徒以外は帰宅させる。

事後研修では、教科の枠を超えて実りのある議論をするため、授業の善し悪しではなく、共通テーマに沿って、各教科に生かせることを中心に話し合う。そして、毎回必ず、大学教授や指導主事ら外部講師を招く。

「校内だけでは、発言に大差がなく、同じレベルの議論に終始しがちです。外部の専門家に参加してもらうことで、自分たちで気付かない視点からアドバイスを受けられ、レベ

ルアップを図れます」(大西校長)

研究テーマは、毎年、前年度の反省や子どもの実態を踏まえて決定する。09年度のテーマは、生徒の学習意欲の向上を目的とした「発問・助言・板書のあり方」だ。07年度から学習意欲に関する研究を進めるうちに、このテーマにたどり着いた。

「研究が深まり、テーマを具体的に絞り込むことが出来ました。基本を改めて見直すという気持ちで研究に取り組んでいます」(大西校長)

3 部活動を休養日にして月1回の研修会を実施

■教師間に共通の授業像をつくり上げる

研修の時間を確実に確保するため、07年度から月1回、校内研修会の時間を年間計画に組み込んだ。年12回のうち2回は、2で紹介した「研究授業」、残りはその事後研修や他の勉強会に充てている。

大西校長が悩んだのは、部活動との兼ね合いだ。同校は体育系・文化系共に部活動が盛んで、学校としての活力を生み出すプラス要素となっている。

「地域の期待も大きいですし、生徒が真剣に取り組む部活動を犠牲にしたくないという思いもありました。そこで、部活動の指導に

熱心な教師と相談し、『月1回の休みであれば影響はない』と判断し、校内研修会のために月1回の休養日を設定しました」(大西校長)

をつくり上げるのに大きな役割を果たしています」と大西校長は語る。

また、08年度から、生徒の声を生かして授業を改善するために「授業アンケート」(図2)を年2回行っている。教師がアンケートの結果を踏まえて作成した授業改善案の共有も研修会で行う。

「教師間に共通の授業像

図2 授業アンケート

数学科 授業アンケート		年	期	組	氏名
このアンケートは、よりよい授業を行うためのものです。本日の授業を振り返り、以下の質問に回答してください。					
1. 教員の授業態度について					
① 明確な目標や授業の進め方を示していますか。	4	3	2	1	
② 授業内容を理解しやすく説明していますか。	4	3	2	1	
③ 授業内容に興味を持って聞いていますか。	4	3	2	1	
④ 授業中の質問や返答に教員がよく聞いていますか。	4	3	2	1	
⑤ 授業中に質問したり、発言したりしていますか。	4	3	2	1	
⑥ パートワークやグループワークを積極的に進めていますか。	4	3	2	1	
⑦ 授業終了後、振り返りやまとめを行っていますか。	4	3	2	1	
2. 本日の授業について					
① 本日の授業内容が自分の考えを深めるのに役立っていますか。	4	3	2	1	
② 本日の授業内容が、自分の学習意欲を高めるのに役立っていますか。	4	3	2	1	
③ 授業中に「よく」「ええ」「なるほど」といった発言をしていますか。	4	3	2	1	
④ 授業中に疑問や不明点がありましたか。	4	3	2	1	
3. 授業や先生への意見(任意)					

前・後期の年2回実施。生徒自身がどのような気持ちで授業に取り組んでいるかを自己評価させるのがねらい。「2.ふだんの授業について」の項目は、元々は空欄になっており、個々の教師が生徒への質問を書き込む

ワークショップやペアワークで 参加意識が高まる研究授業に

山形県 山形市立高橋中学校

山形市立高橋中学校は、小規模校だからこそ、教科を超えて教師全員で授業を見合うことを重視すべきと、「一人一研究授業」を始めた。指導案は簡略化し、実施日は大枠を決めておくなど、全員が参加しやすい工夫が随所に見られる。

課題

- ・小規模校で教師数が少ないため、教科内だけで授業力を高めるには限界があった
- ・「目指す生徒像」の共有と授業での実践が十分でなかった

実践

1 教師全員で研究主題を設定

- ・2月に行う総括会では、教師全員が意見を出し合って、次年度の研究主題を検討する
- ・4月に生徒の課題を洗い出す全員参加のワークショップを実施する

2 当事者意識を持てる研究授業づくり

- ・教師一人ひとりが研究テーマを設定し、年1回の研究授業を行う
- ・事後研究会の協議会では、まずペアワークを行い、全員が発言しやすいとする

3 次年度の改善に確実に結び付ける

- ・「読み返したくなる」研究紀要を作成
- ・研究授業日の決め方や事前研究会の実施など、教師の状況や意見を踏まえて、研究授業の手法を少しずつ改善する

成果

- ・教科にかかわらず、他教師の授業を参考にして指導法を工夫する教師が増えた
- ・皆で研究授業をつくっている意識が芽生え、主体的に取り組む教師が増えた
- ・「課題設定～実践～振り返り」のPDCAサイクルが回るようになった

School Data

◎1952(昭和27)年開校。山形市郊外の緑豊かな地区に位置する。2008年度に山形市から3年間の研究委嘱を、09年度に山形県教育センターから単元づくりについての研究協力依頼を受け、「学びの価値を実感し、主体的に学ぶ生徒を育てる指導の工夫」をテーマに研究。



校長◎永沼洋美先生 生徒数◎221人

学級数◎9学級(うち特別支援学級2)

所在地◎〒990-2235 山形県山形市大字中里38

TEL◎023-686-6029

URL◎<http://www.takadate-j.ymgt.ed.jp/>

研究授業を活性化させる!

教師全員でつくり、高め合う 研究授業に工夫を凝らす

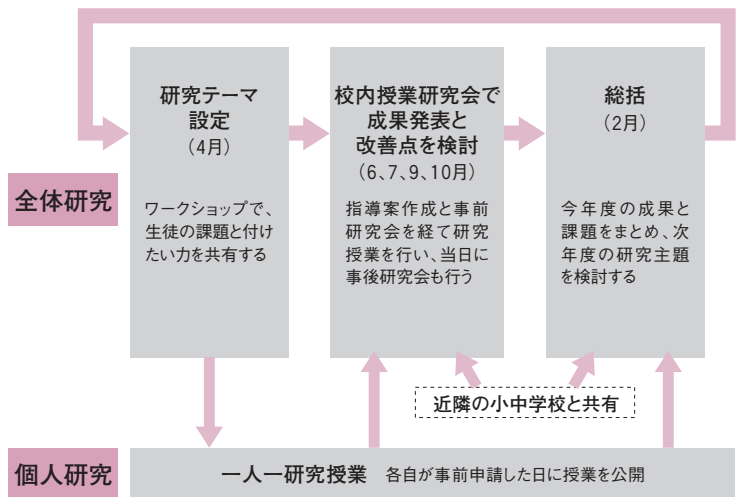
高橋中学校が校内研究授業に力を入れ始めたのは、2006年度のこと。その背景を、教務主任の堀川明先生は「本校は教師数が1教科当たり1〜2人と、教科内だけで刺激し合い、授業力を高めるのは難しい状況です。そこで、まずは教科の壁を超えて授業を見せ合うことから始めようと考えました」と話す。一人ひとりが主体的に取り組めるようにと、教師個別の研究テーマを設定し、全員が年1回の研究授業を行う「一人一研究」を始めた。しかし、初年度は授業の進度や日程的なタイミングが合わない教師も出てきて、全員が研究授業を行えたわけではなかった。そこで、2年目は年度当初に本人に大まかな予定を申請してもらい、その日が近付くと月間計画表に明記するなどして実施を促すようにした。更に、指導案は簡略化し、研究授業そのものが負担とならないようにした。

全体研究会として年間計画に組み込み、必ず全員が参観することとしている。高橋正博教頭は、「常に変化する子どもに合わせて、教師も指導法の工夫、改善を考えなくてはなりません。そのために必要な研修の時間は、どんなに多忙であっても確保し、学校として保障すべきだと考えています」と話す。研究テーマは生徒の実態に即して年度ごとに変えるが、これも教師全員で話し合っており、新学習指導要領の趣旨を踏まえた上で、改めて「目指す生徒像」を共有する大事な機会となっている。

他教科との意見交換が浸透し 事前研・事後研が活性化

現在の形式の校内研究授業は4年目を迎える。そのスタイルはすっかり定着した。事後研究会での発言は格段に増加。マグネットの効果的な使い方をまねるなど、他教科での実践や事後研究会での指摘を自分の授業に取り入れる例がよく見られるようになった。研究授業での改善案を受けて再度、研究授業を行う「リベンジ授業」を希望する教師も出てきた。研究主任の尾形晶彦先生は、「課題設定から事後研究までのサイクルが軌道に乗ったため、09年度には事前研究会として複数教師による指導案の検討を始めました。授業を皆でつくり上げるといふ雰囲気は確立されているため、抵抗感なく取り組んでいます」と話す。

高橋中学校の研究授業の流れ



山形市立高橋中学校
研究主任、美術科担当
1学年担任
尾形晶彦
Ogata Masahiko



山形市立高橋中学校
教務主任、技術科担当
堀川明
Horikawa Akira



山形市立高橋中学校教頭
高橋正博
Takahashi Masahiro

1 研究テーマは教師全員で話し合って決める

■研究主題に沿い各自の研究テーマを設定

高橋中学校では毎年2月に、教師全員参加による研究総括会を開く。ここでは、1年間の研究を振り返ると共に、生徒の成長や課題を報告し、次年度の研究テーマを皆で話し合っ

て決める。08年度の総括会では、09年度の研究テーマを「豊かな表現力・発表力の向上をめざして」とした。

ていくという意識を持つためにも、会議では

何らかの形で全員から意見を出してもらっています。その過程こそが、多忙な中でもしっかり研究授業に取り組みとういう前向きな姿勢につながっていると思います」（堀川先生）

年度当初の4月には、教師全員でワークショップを開催。「本校の生徒に足りないものを一人ずつ付せんに書いてもらい、KJ法

（*）を用いてグルーピングをして課題を洗い出す。年度末に決めた研究テーマを再確認

すると共に、新たに赴任した教師に、少しでも早く学校の実態をつかんでもらうためだ。次に、研究主題に沿って教科ごとに目指す生徒像を共有した上で、各教科の研究テーマを決定。それを基に教師一人ひとりが「一人一研究」として研究の内容を決める。軸となるものが明確であり、かつ、その決定に自分も参加しているため、教科特性を生かして生徒の課題にアプローチできる研究テーマを無理なく設定することが可能だ。

2 事後研はペアワークで意見を出しやすくする

■時間が掛かっても発言機会を重視

「一人一研究」の成果と改善点を共有する授業日は、年度当初に各教師が授業予定日を申請し、研究主任が一覧表にして配布。実施日が近付いたら改めて告知をし、授業のない教師は原則、参観する。指導案は、教師の負担軽減のために簡略化したもので良いとしているが、取り組み4年目を迎え、事前に指導案を配布する教師が出てきたという。

授業後には参観者全員による事後研究会を1時間程度開く。まず授業者が自己評価をし

た後、隣に座っている教師とペアで気付いたことや生徒の様子などを10分程度話し合う。

「いきなり全体で協議をすると発言者が固定してしまっていたので、初めに2人での話し合いにし、発言せざるを得ない状況にしました。ペアワークを取り入れてから、事後研究会は活発になりました」（尾形先生）

その後に行う全体の協議では、ペアの1人がその内容を報告しながら司会がポイントを集約。授業者だけでなく、学校全体の指導力向上につながるよう、研究主題に立ち返って

話し合いを進める。例えば、「教師の指示をきちんと聞かせる授業にしよう」など、教科を超えた改善点を皆で確認し合う。



ペアワークでは全体協議での報告に時間が掛かってしまうが、より発言の機会を多くするため、グループワークにはしなかった

* あるテーマについての課題やアイデアを紙に書き出して整理する、情報収集や課題解決のための手法

研究授業を活性化させる!

3 研究会の内容はプレスリリースで共有

■研究紀要をより効果的な内容に変更

校内授業研究会の内容は、「The校内研」というA4判のレポートにして全教師に配布、参観できなかった教師に報告すると共に、授業者・参観者も振り返るようにした(図1)。

更に、年度末には『研究紀要』を作成。1年分の「The校内研」、9教科の研究総括、教師各自の「一人一研究」を基にした研究総括をまとめる。教師各自の総括内容は、①授業のねらい、②具体的な手立て、③指導の大

綱、④成果と課題とした。以前は校内授業研究の指導案を載せ、その項目に対応させて振り返りと課題を書いてもらっていた。しかし、指導力向上に重要なのは、1度きりの授業の反省ではなく、1年間を通じた指導の振り返りと課題であるとして、現在の形式となった。

このようにして、1年間の総括と次年度に向けた課題を共有し、2月の研究総括会を迎えるというPDCAサイクルを4年掛けて確立させた。

4 事前研究会を開き、皆で指導案を練り上げる

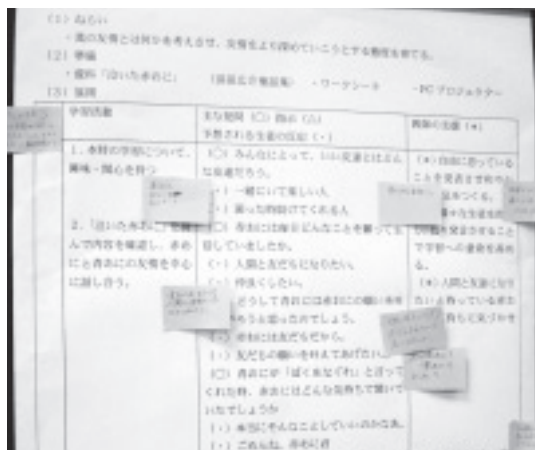
■取り組みの浸透を受け、新たな段階へ

09年度は、新たな試みとして「事前研究会」を行った。研究授業の1週間前に授業者が作った指導案を検討し、より良い指導案にするというもの。1回目は1年生の道徳の授業で、教頭と学年団、山形県教育センターの指導主事が参加。指導案を模造紙に拡大し、気になる個所に付せんを張りながら検討した(図2)。「他教科に意見を言うことに慣れたためか、初めての事前研究会にもかかわらず、教師の発問のタイミングや内容の吟味など、皆、率直に指摘していました。指導案作成の過程を知っているからこそ当事者意識を持って事後研究に臨めるのも良い点でした」(高橋教頭)

今後は、事前研究会を行う研究授業を増やし、事前研究会→授業→事後研究会のサイクルを作るのが課題だ。

また、校内研究授業会の案内は、市内の全中学校と校区の小学校2校にも送付。他校の教師の参観も受け入れ、さまざまな意見を聞く機会としている。

図2 事前研究会の様子



授業案を拡大コピーして机の中央に置き、検討事項を付せん張りながら、話し合いを重ねた。最終的に授業案は大きく変わった

図1 「The校内研」



*図1はウェブサイトで拡大してご覧いただけます
http://view21.jp/c9412/

教科共通のテーマを設定し グループワークで負担を平準化

岡山県 岡山市立福浜中学校

岡山市立福浜中学校は、教科の枠を超えた研究グループをつくり、授業公開に向けた指導案を皆で練り上げる体制を築いた。授業公開日はもちろんのこと、事前検討会の日程も年間計画に組み込むなど、学校ぐるみで授業改善に取り組んでいる。

課題

- ・生徒指導に迫われ、研究授業を参観できる教師が少なかった
- ・授業者の事前準備の負担が大きく、その割に効果や達成感を感じにくかった
- ・研究授業の意義や他の取り組みとの優先順位付けがあいまいだった

実践

1 教科共通の研究テーマを設定し、グループ別に研究

- ・全教師が三つの研究グループのいずれかに所属
- ・教科に偏りが出ないグループ編成とする
- ・研究授業の指導案はグループ全員で作成する

2 外部指導者を招く

- ・指導案の検討段階から外部指導者の知見を積極的に取り入れ、研究の質向上を図る

3 すべての日程を年間計画に組み込む

- ・トップダウンで一気に導入
- ・事前研究会も含め、研究授業に関するすべての日程を年間計画に組み込んでおく

成果

- ・多くの教師が「研究授業は、皆で取り組むと内容が深まり、楽しい」と感じるようになった
- ・授業者の負担が減った
- ・教科指導以外の場面でも、研究授業を生かした指導の工夫が見られるようになった

School Data

◎1947(昭和22)年開校。「自主・誠実・奉仕」の校訓の下、部活動が盛ん。学区は、2009年に政令指定都市となった市内の、南側の干拓地に位置する。かつては広大な農業地帯だったが、戦後は急速に商工業化が進んだ。



校長◎金谷啓司先生 生徒数◎816人

学級数◎26学級(うち特別支援学級2)

所在地◎〒702-8036 岡山県岡山市南区三浜町2-3-26

TEL◎086-262-1178

URL◎<http://www.city-okayama.ed.jp/~fukuhamac/>

研究授業を活性化させる!

教科を超えたグループ編成で 全員参加型の指導案を作る

福浜中学校では、長年、異動してきた教師が授業を公開する取り組みを続けてきた。ただ、授業の空き時間が少ない上に、生徒指導に追われていることから、公開授業を実施しても参観できる教師は少なかった。そのため、授業者が手間を掛けて準備をしても効果や達成感が感じられにくく、研究授業は形骸化していた。

そうした同校が研究授業の改善に向けて動き出したきっかけは、2007年度に岡山県教育委員会から「『授業で勝負!』支援事業」の研究指定を受けたことだ。教務主任の湯浅淳子先生は、「さまざまな課題にあれもこれももと取り組むのではなく、生徒も教師も『授業』で勝負しよう。学力向上への即効性はなくても、急がば回れの気持ちで行こうと考えました」と話す。

目指したのは、「授業改善は一人では出来ない」という意識の下、教科の枠を超えて教師全員が参加して授業改善に取り組む仕組みづくりだ。最大の特徴は、教科に関係なく全教師を三つのグループに分けたこと（P.16）。

そして、公開授業を担当する教師が一人で指導案をつくるのではなく、指導案検討会を開いてグループ内で話し合っって指導案をつくり、公開授業を行うことだ（P.17）。

1グループ当たりの人数は15人前後。基本的に年3回、1回2グループが同じ日に公開授業をする。1回の公開授業につき、事前に指導案を検討する機会を2回設定。授業公開日に加えて、事前検討会の日程も年間計画に組み込んだ（P.19）。

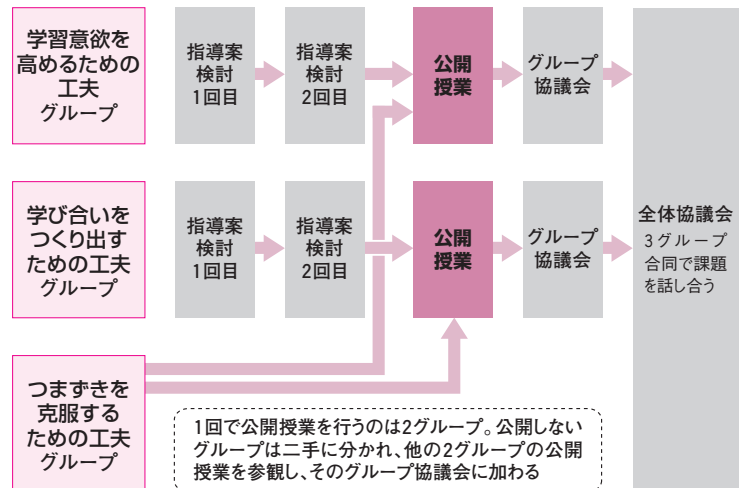
当初は、他教科の指導案に意見を述べることをためらう教師が多かったが、回を重ねるごとに教師同士が打ち解け、率直に意見を言えるようになったという。

「みんなで考える場」が生まれ 教科外の指導改善をも生む

公開授業は09年度で3年目を迎え、教師の意識も変化している。研究主任の千田和彦先生は、「当初は多くの先生が『手間が掛かり面倒だ』『忙しいからできれば担当したくない』と思っていました。しかし、実際に皆で取り組みと楽しいものだと分かりました」と話す。取り組み1年目が終わる頃には、「みんなで研修できる場が出来たことが何より良かった」「他教科の授業について、知らないことが多過ぎた。教師でさえそうなら、保護者が誤解してしまうのも分かると思った」といった声が上がった。

協議会での提案が教科の授業以外の教育活動に反映される例も出てくるなど、教科の枠を超えた授業公開は、教師の一体感を生み、指導改善に結び付いている。

第1回(全3回中) 公開授業の流れ



岡山市立福浜中学校
研究主任、数学科担当
千田和彦 Senda Kazuhiko



岡山市立福浜中学校
教務主任、国語科担当
湯浅淳子 Yasaka Junko



岡山市立福浜中学校校長
金谷啓司 Kanadani Keiji

1 3グループに分かれ、教科を超えた共通テーマを設定

■まずは他校の取り組みをまねる

教師は全員、「学習意欲を高めるための工夫」「学び合いをつくり出すための工夫」「つまずきを克服するための工夫」のいずれかの

テーマの研究グループに所属する(図1)。

これらのテーマを選んだのは、教科特有の課題ではなく、全教科に共通する生徒の学習態度を研究の出発点にし、担当教科の枠を超えて意見を出し合えるようにするためだ。

テーマ設定に際しては、他校の取り組みを参考にした。千田先生は、「どの先生も多忙で、グループ型研究のノウハウもない状態で、ゼロから新しいものをつくり上げることは難しい。他校の取り組みを知るために、ホームページで調べたり、視察に訪れたりしました。その中から、本校の生徒に足りない点・改善すべき点が似ていた中学校の研究テーマを取り入れました」と説明する。

■教科の偏りがなくグループ分け
所属するグループをどう決めるかは、当初、「教科単位のグループが良い」「担当教科が同じ教師をメンバーに入れて欲しい」といった意見が出た。それでも、「いろいろな教科担当が混在した形での取り組みを」と提案し、教師に希望テーマを聞いた上で、特定の教科担当が偏らないように編成した。

湯浅先生は、全員参加による公開授業が続いている最大のポイントは、この教科混成グループにしたことと説明する。

「中学校には、他教科の指導内容に口出ししにくい雰囲気があります。しかし、教科単位のグループにすると、担当教師が一人しかいない教科もあります。それでは研究が深まりません。このグループ分けによって、研究を教師全員の共通課題とすることが出来ました」(湯浅先生)

希望者が多かったテーマは「学習意欲」と「学び合い」で、「つまずき」は少なかった。例えば数学や英語は生徒がどこでつまずいたか分かりやすいけれども、実技教科では「つまずき」という概念がしっくりこないからだ。そこで、つまずきを「出来ない」「分からない」を含めて広くとらえることにした。

「生徒がつまずくだけでなく、教師があえて生徒をつまずかせて、知識や技能の定着を図る工夫も含めて研究しています」(千田先生)

授業を担当するのは、これまでの経緯も踏まえ、新たに赴任してきた教師が中心だ。ただし、そうでない教師が自ら希望して担当することもあり、原則としてグループで話し合っ

図1 3つのグループの研究課題

*福浜中学校「研究紀要」を元に編集部で作成

学習意欲を高めるための工夫

課題である「基礎学力の定着と学習意欲の向上」を目指し、特に授業の導入部分での生徒の興味・関心を持たせる指導の工夫を研究

学び合いをつくり出すための工夫

学校内のさまざまな場面で、友だちとの会話や活動を通じて多くの知識・技能を身に付けていく過程で「よりよい学び合い」をつくる学習活動の開発と実践を研究

つまずきを克服するための工夫

既習事項から本時の内容理解、黒板の写し方など、生徒一人ひとりで異なるつまずきの場面や原因を明らかにして、それらを克服させる指導の工夫を研究

研究授業を活性化させる!

2 指導案はグループで話し合っ て作成

■専門外だからこそ「つまずき」を代弁できる
授業公開日の前には、グループごとに2回の指導案検討会を開き、授業を公開する教師が作成した指導案について、全員で意見を出し合っ
て練り上げていく。

当初は、教師数の多い教科の教師の発言が目立っていたり、授業者と同じ教科担当者の意見が少し出ただけで終わってしまうことも多かった。ところが、他教科の教師が「素人」の立場で不明点を「分からない」と素直に質問するようになってから、次第に意見が飛び交うようになったという。

「自分が中学時代に苦手だった教科では、苦手な生徒の気持ちがよく分かります。教師の視点で『ここをこうした方が良い』と言うのではなく、生徒の立場になって『先生、ここがよく分からないのですが』という発言をするようにしました。すると、指導案の内容が深まり、検討会の雰囲気もどんどん良くなっていきました」(千田先生)

授業者と同じ教科ならば、「生徒はここでつまずく」「ここで分からなくなる」という共通理解がある。ところが、共通理解のない他教科の教師には、その前段階である授業内容をのみに込めな
いことがある。それを指摘することに
よって、同じ教科の教師同士では
付きにくいポイントを指摘できるのだ。

検討会では、「皆で模擬授業をやってみましょう」という時もある。例えば、ボディーパーカッションを取り入れた音楽の授業では、音楽教師の指導の下に体を動かしてみると、「これでは出来ないよ」と運動が苦手な教師から声が上がった。こうした意見を取り入れながら、グループの共同作業で指導案の完成度を高めていく(写真1、P.18図2)。

共同作業といっても、授業者に物理的な負担は掛かる。だが、共同指導案のような形になることが、心理面での負担を軽減している。

■最初はしづしづ、気付くと会議時間を延長
多忙なあまり、指導案検討会への足取りが重くなる教師もいる。ところが、始まると教師の発言が飛び交って盛り上がり、1時間の予定が1時間半、2時間と延長される
ことがよくあるという。

「毎回、一歩踏み出すまでが大変です。しかし、始めてしまえば、『これが私たちの仕事なんだ』と思え、何も発言しない教師はいません。他教科のことですから心理的に楽な面もあり、皆が思ったことを率直



写真1 「学び合いをつくり出すための工夫」を研究するグループで、音楽の指導案を全員で検討している様子。生徒の立場になり、指導案に沿ってボディーパーカッションをしている



写真2 「学習意欲を高めるための工夫」を研究するグループの事後研究会の様子(P.18)。この回は同グループの授業はなく、参観した他の2グループの授業について話し合った

に言っています。『楽しかった』『充実感があった』という経験は、子どもにとっ
ただけでなく教師にとっても大事だと思
います」(湯浅先生)
金谷啓司校長は、指導案作りの別の効果として、教科の枠を超えた共同作業によって同僚としての意識が高まったと評価する。
「指導案検討会では、先生方が互いを認め合い、意見に耳を傾け合っている場面を何度も目にしました。自分で思っていたような授業が出来ていない先生もいますが、そうした先生も発言しています。指導案検討会での共同作業を通して、皆で良い学校をつくるという意識が着実に高まっているように感じます」

3

研究者や指導主事を招き、客観的な目で見てもらう

■前回の協議会での結果を添付

研究授業当日は、各自が所属するグループの授業を参観する。授業を行わないグループは二手に分かれて他のグループの授業を参観する。そして、当日中に「グループ協議会」と「全体協議会」を開く。

グループ協議会では、参観した授業に分かれて、それぞれ良かった点や反省点などを話し合う（P.17写真2）。直後に行う全体協議会では、グループ協議会の内容をグループごとに発表する。

「研究授業はあくまでも校内の取り組みで、外部向けの行事ではありません。指導案検討会で生まれた自由に意見を言い合う関係を生かし、協議会も堅苦しい雰囲気にならないようにしています」（湯浅先生）

いずれの協議会でも、前回の協議会で検討された内容のまとめを必ず資料に添付する。毎回の協議会が単発に終わることなく、前回の課題を踏まえて、改善された点や引き続き検討が必要な点などを、教師全員で確認するためだ。

■自由な発言が教科指導以外の改善にも波及
08年10月の協議会では、「学び合い」グル

図2 事前検討を経て出来上がった指導案の例

学び合いを作り出すための工夫を研究するグループ 第1学年 A組 音楽科学習指導案 平成19年11月7日（水）第5校時 第二音楽教室 指導者		
研究課題	「よりよい学びあい」をつくる学習活動の開発と実践	
単元（題材）	「ボディパーカッション」〈身体表現・創作〉	
単元計画	第1次 「拍・拍子について知る」……………1時間 第2次 「リズムを叩く」……………2時間 第3次 「リズムでアンサンブルする（Body Rhythm）」……………3時間 1 グループを作る……………1時間 2 グループ練習……………2時間（本時は第2時） 第4次 「リズムを作る」……………4時間	
目 標	<input type="checkbox"/> グループで協力して練習することができる。（関心・意欲） <input type="checkbox"/> 正確なリズムでアンサンブルをすることができる。（表現の技能）	
学習活動	指導・支援と留意点	評価等
1 本時の目標を決める。	・各グループ毎に表を移動し、自己目標シートを使い、本時のグループ目標を考え、さらに生徒個人で特にがんばるところを個人目標として考えさせる。	自己目標シート
2 リズム練習をする。	・プリントVol.2を使い、全員でウォーミングアップをさせる。	プリントvol.2
3 パート毎に分かれてパート練習をする	・テンポやリズムの統一を図り、正しいリズムで演奏できるように指導する。 ・苦手な生徒にも、正しいリズムの中で演奏させることによって、それぞれの苦手な部分に気づかせる。 ・練習したことを確認するために全員で合奏をさせる。	・正確なリズムで演奏することができるか。 【表現の技能】（観察）
4 グループ練習をする。	・パート練習で練習したことを生かして、さらに思いついた演奏ができるように練習させる。	・グループでまとまって練習することができるか。 【関心意欲】（観察）
5 まとめ	・全員で演奏させる。 ・特に優れた演奏をすることができるグループには、発表させる。（苦手な生徒にイメージを作らせる。） ・自己評価をシートに記入する。	・正確なリズムでアンサンブルができるか。 【表現の技能】（観察）
研究課題との関連	・グループで活動することによって意欲的な学習活動ができる。 ・各グループがお互いに学びあい、小教育集団となることができる。	

A4判1枚、本時案のみを要素を絞って簡潔に書く。ひな形や過去の指導案は、全校のネットワークに保存している



指導案のひな形は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。
<http://view21.jp/c9413/>

ープから「生徒の生活班を現行の6〜7人よりも4人にした方が、学び合いが生まれやすいのではないか」という提案があった。グループ学習の際、少数数のグループならば生徒全員が何らかの役割を持って主体的に活動で

きることから、生活班の編成にも応用してはどうかと考えたためだ。この提案は、その後の研究授業で検証を続けた。結果、09年度から生活班を4人の単位に変更することになった。

研究授業を活性化させる!

■ 指導案作成の段階から外部の助言を受ける

千田先生は、「研究授業を続けるには、『仕組み』と『研究の質の向上』の両輪が回るこ
とが大事」と話す。指導案作成では、07年度
から岡山大教職大学院の住野好久教授の協力を
得ている。1回目の指導案検討会の結果を
踏まえて授業者が修正した指導案を住野教授
に送り、アドバイスを受けた上で2回目の指
導案検討会を開く(図3)。研究授業当日に

4 すべてこの日程を年間計画に組み込む

■ トップダウンで一気に導入

5年ほど前まで、同校は生徒指導に追われ、
研究授業を出来るような状況になかった。学
校が落ち着き始めていたとはいえ、研究授業
を始めた当初は多くの教師が乗り気ではな
かったという。湯浅先生は、「研究指定を理由
に、反発を覚悟でやや強引に導入しました。
生徒指導も部活動指導もどれも大事なことで
すが、教科指導力の向上も重要です。時には
トップダウンで推進することも必要ではない
でしょうか」と指摘する。

金谷校長は、授業者など中心的な役割を果
たしている若手教師に気を配る。

「若手の先生方には思い通りにやってほし
いと考えています。ただ、経験が少ない分、
壁に突き当たること多いので、悩んでいる
ようだなと感じた時には声を掛けるようにし

は、岡山市教育委員会から指導主事が訪れ、
住野教授にも都合がつけば出席してもらおう。
「自校の教師だけでは、客観性が失われが
ちです。私たちとは違う視点から研究や授業
の意味をまとめ、筋を通してくれる人、見通
しを与えてくれる人が必要です。外部指導者
を招くことで『もつとこうすれば良いのだな』
という先生方の気付きの質を高めることが、
研究授業に対する役立ち感の向上や、これか

ています」(金谷校長)

■ 指導案検討会も年間計画に組み込む

公開授業と指導案検討会の日程は、あらか
じめ年間計画に組み込んでいく。これも、こ
の取り組みが続いてきたコツの一つだ。

「事前に日程が決まっていれば、その日に
予定を入れないようにします。指導案検討会
の日も、急な生徒指導などやむを得ない場合
以外は、全員参加が原則です」(湯浅先生)

07年度は、以前から続けていた新たに赴任
した教師の授業公開に加えて、年3回の公開
授業を実施した。しかし、教師の負担が大き
くなり過ぎたため、08年度は一本化した。ま
た、09年度は、岡山市教育委員会の「いきい
き学校園づくり事業」の一環として、教師全
員が授業を公開することになった。そのため、
通常3回の公開授業を2回に減らした。年度

からも頑張つて続けていこうとする推進力にも
なっています」(湯浅先生)



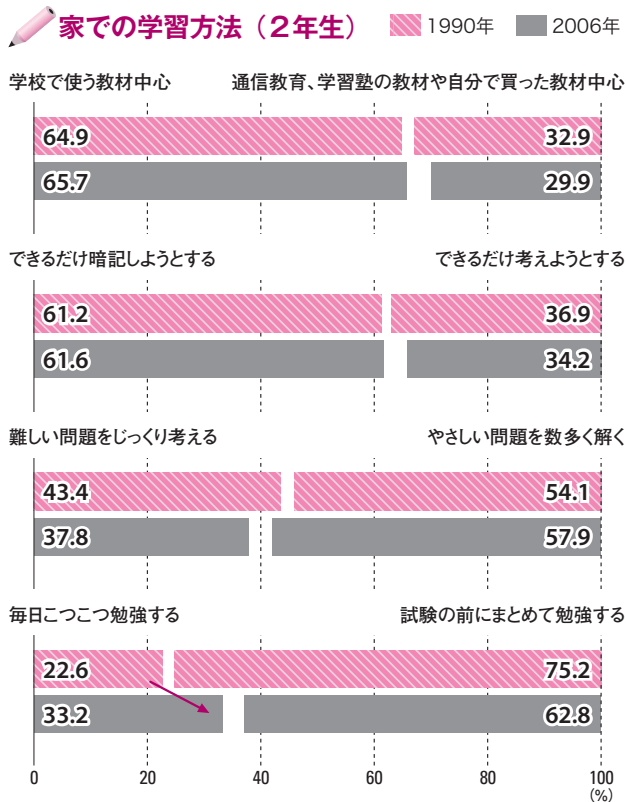
の状況に応じて他の研修と統合するなどし、
教師の負担が増えないように調整している。

■ 「総合的な学習の時間」で時間割を調整

公開授業は教師全員が参観できるようにす
るため、当日、授業を受ける2学級の生徒以
外は全員下校させている。生徒を学校に残し
て自習をさせておくと、生徒指導に対応する
教師が必要となるためだ。

また、08年度までは、公開授業のために時
間割を調整する教科は学級により異なってい
たため、進度を調整しながら時数を確保する
のが難しかった。そこで09年度は、水曜日5
限目を全学年共通で「総合的な学習の時間」
とし、ここに授業公開日を設定した。「総合
的な学習の時間」ならば別日程でまとめて設
定しやすい。授業研究を重視する姿勢が、時
間割の工夫につながっている。

1 「毎日こつこつ勉強」が増加

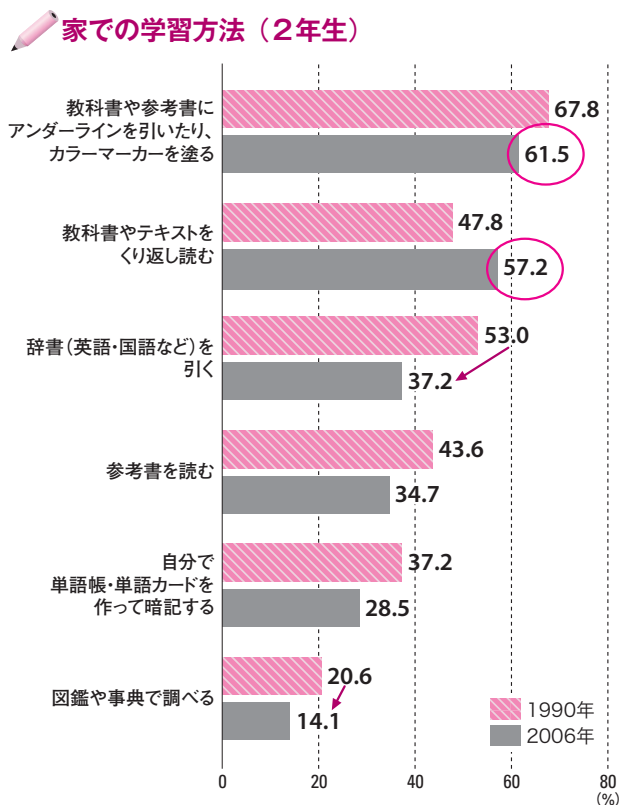


◎グラフは、対になった学習方法のうち、どちらが自分の勉強の仕方に近いかを尋ねたものだ。学校の教材を使って、暗記を中心に勉強するタイプが多いことが分かる。1990年の調査結果と比較すると、毎日こつこつ勉強する生徒が増加している点が注目される。

* 対になった項目のうちいずれかを選択。数値は選択された比率を示す。両項目間の空白は「無回答・不明」を表す
* 全12項目より一部抜粋

出典／「第4回学習基本調査・国内調査」
Benesse 教育研究開発センター

2 単純で反復的な学習方法が増加



◎学習方法で多く用いられているのは、「アンダーラインを引く」「くり返し読む」といった教科書を使う方法のようだ。1990年の結果と比較すると、辞書を引いたり、図鑑などを使って調べたりといった、比較的手間がかかる学習方法が敬遠されているようだ。

* 数値は「よくする」と「時々する」の合計
* 全12項目より一部抜粋

出典／「第4回学習基本調査・国内調査」
Benesse 教育研究開発センター

学習習慣・学習意欲

全国的に見て、子どもの学習行動や意識にはどのような傾向が見られるのだろうか。ここでは、子どもの授業や家庭学習に対する意識、成績の違いによる意識の差に関するデータをまとめた。

本コーナーで紹介している調査結果の詳細はウェブサイトをご覧ください

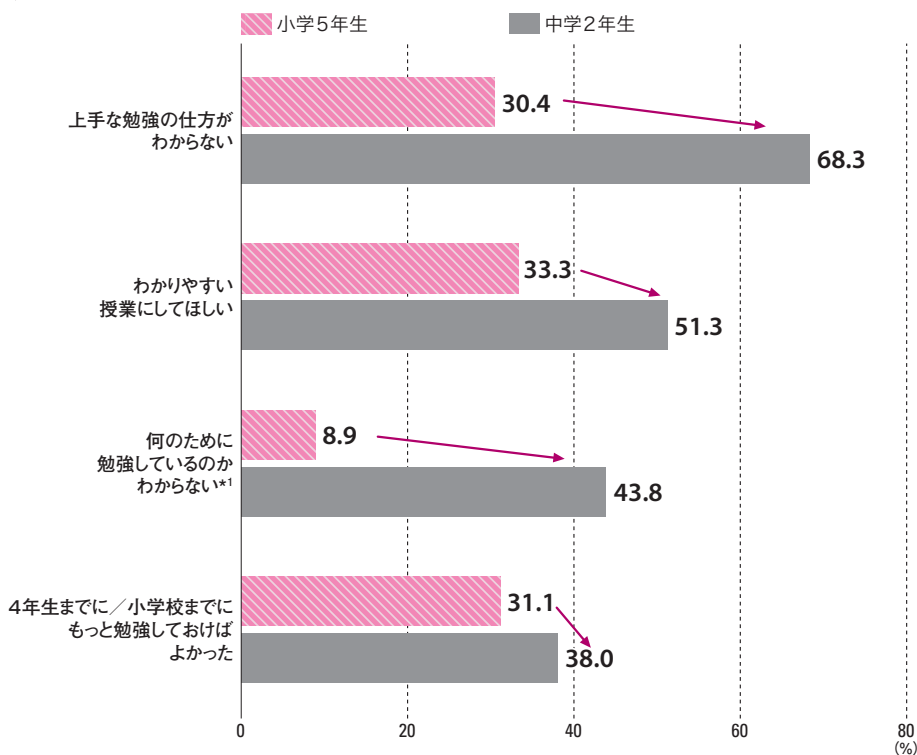


第4回学習基本調査・国内調査
<http://view21.jp/c9421/>
第4回学習基本調査・学力実態調査
<http://view21.jp/c9422/>

※第2回子ども生活実態基本調査は3月上旬公開予定です

3 中学生になると学習の悩みが増加

学習上の悩み（小学5年生、中学2年生）



◎学習上の悩みは、小学生から中学生になると大きく増加している。特に、7割近くの生徒が「上手な勉強の仕方がわからない」と感じている。勉強しなければならないことは分かっているにもかかわらず出来なかったり、なかなかうまくいかなかったりするもどかしさが、悩みになっている様子が見えがえる。

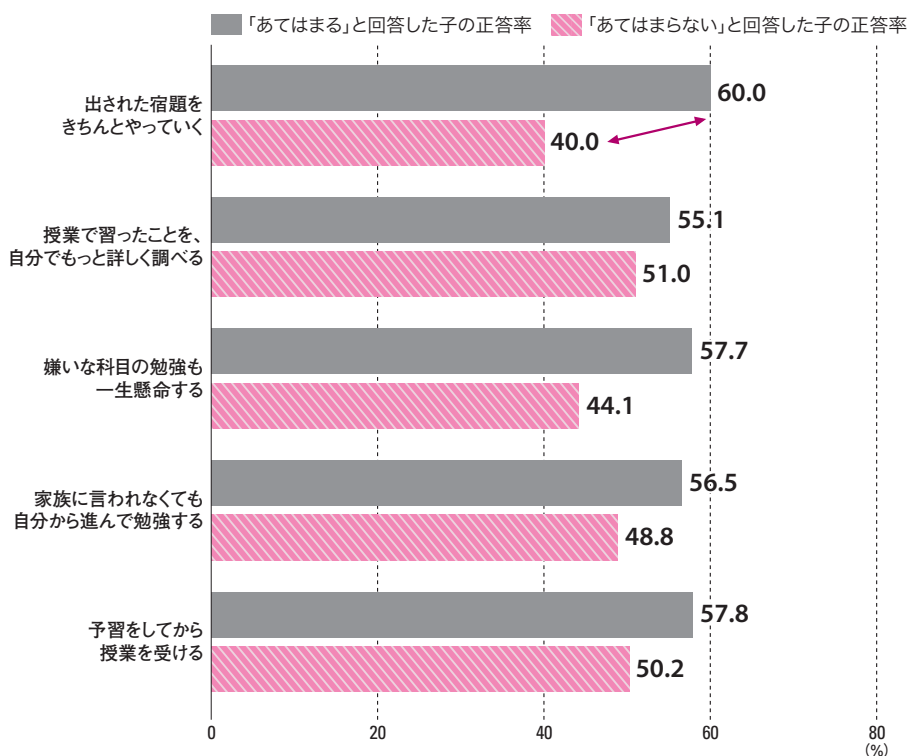
*複数回答。全15項目より一部抜粋

*1 中学2年生は「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」

出典/「第4回学習基本調査・国内調査」
Benesse 教育研究開発センター

4 宿題や苦手科目の勉強をする子どもは正答率が高い

家での学習の様子と成績の関係（2年生・数学）

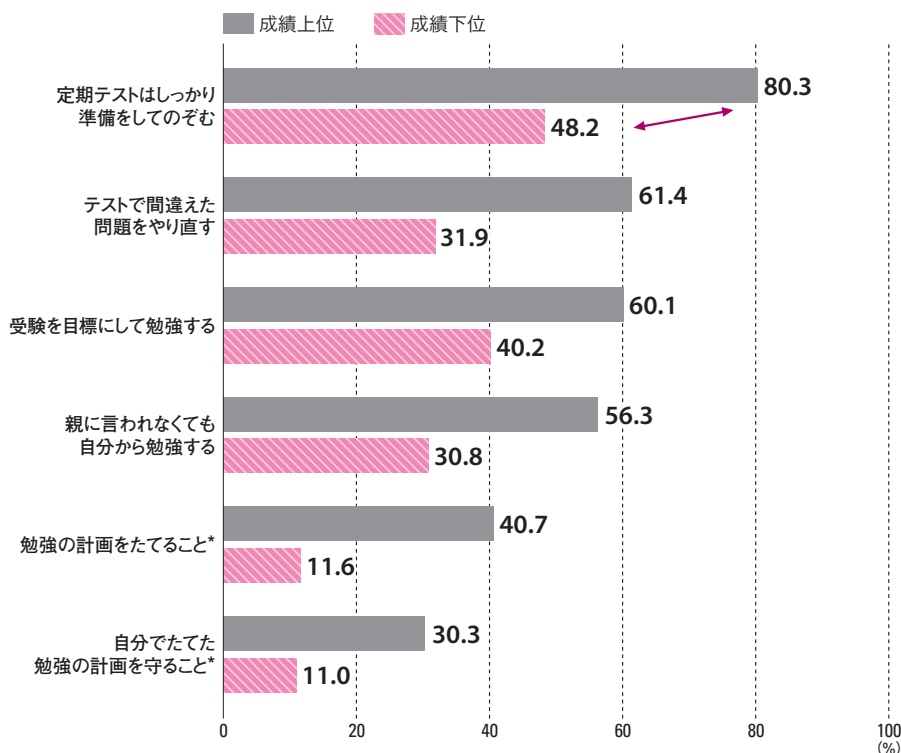


◎グラフは、子どもの家庭学習の様子を、学力調査の結果（平均正答率）別に見たものだ。例えば、「出された宿題をきちんとやっていく」という問いに「あてはまる」と答えた子どもは、そうでない（「あてはまらない」）子どもよりも正答率が高い。与えられた課題を着実にこなし、かつ、意欲的に学習している子どもの方が正答率が高いことが分かる。

出典/「第4回学習基本調査・学力実態調査」Benesse教育研究開発センター

5 成績上位の子どもは計画的に学習に取り組む

勉強の取り組み方（1～3年生・成績別）



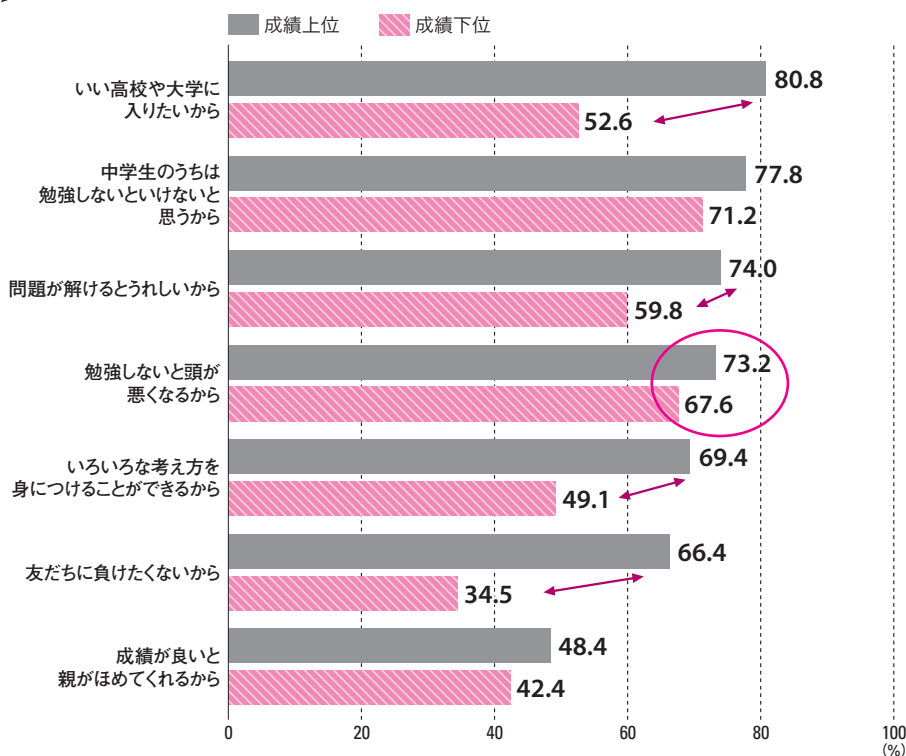
◎成績（子どもの自己評価）によって、学習の取り組み方はどのように異なるのだろうか。最も開きがあるのは、「定期テストはしっかり準備をしてのぞむ」で、成績上位層は約8割が出来ているが、成績下位層は5割弱に留まる。全体的に見て、成績上位層の子どもの方が、自律的な学習習慣を身に付けていると言える。

*数値は「とてもそう」と「まあそう」の合計。*のみ、「とても得意」と「やや得意」の合計。成績中位の数値は省略した

出典 / 「第2回子ども生活実態基本調査」Benesse 教育研究開発センター

6 成績上位の子どもの学習理由は、前向きで目的が明確

学習する理由（1～3年生・成績別）



◎成績（子どもの自己評価）によって、学習の動機についてはどのように異なるのだろうか。成績上位の子どもほど、「いい高校や大学に入りたいから」「問題が解けるとうれしいから」など前向きな動機を挙げる比率が高い。また、切磋琢磨し合う友だちの存在も大きい。一方、「勉強しないと頭が悪くなるから」など、受け身な考え方やネガティブな動機には、成績による大きな差は見られない。

*数値は「とてもそう」と「まあそう」の合計。成績中位の数値は省略した

出典 / 「第2回子ども生活実態基本調査」Benesse 教育研究開発センター

研修会や保護者会に役立つ！ 学習習慣や学習意欲に関する お薦めウェブサイト

文部科学省／国立教育政策研究所

平成21年度全国学力・学習状況調査 調査結果について

<http://www.nier.go.jp/09chousakekka/index.htm>

◎全国学力・学習状況調査の結果一覧。都道府県別、地域規模別の結果や、知識に関する調査と活用に関する調査の相関なども見られる

特定の課題に関する調査 (国語、社会、算数・数学、理科、英語)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032814.htm

◎国語は漢字・長文記述、算数・数学は数学的に考える力・計算力、といったように、各教科の特定の課題に関する学力調査結果や、児童・生徒、教師の意識が分かる

OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 調査結果

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/pisa/

◎2000年、2003年、2006年の各調査結果の要約。例えば、2006年調査結果では、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーそれぞれの平均得点の国際比較一覧などが見られる

国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS2007)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032813.htm

◎小学4年生、中学2年生を対象にした算数・数学と理科の学習到達度を図る国際比較調査。両教科の重要性をどう認識しているかや自信の有無など、子どもの意識が分かる

藤沢市教育文化センター

第9回「学習意識調査」

<http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/kyobun-c/page100054.shtml>

◎神奈川県藤沢市内の中学校3年生を対象に、1965(昭和40)年以降、5年毎に行っている学習意識調査。調査データを基にした、学習意欲に関する分析結果も興味深い

※上記は2009年12月時点での情報です

1 2 3 出典

「第4回学習基本調査・国内調査」 Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2006年6～7月、調査対象は全国3地域【大都市（東京23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）】の小学5年生と中学2年生。総受験者数は小学5年生2,726人、中学2年生2,371人。調査方法は学校通しによる自記式調査

4 出典

「第4回学習基本調査・学力実態調査」 Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2006年11月、調査対象は、「第4回学習基本調査・国内調査」の対象者（上記）のうち、小学5年生2,446人、中学2年生1,723人。調査方法は学校通しによる自記式調査（テスト）

5 6 出典

「第2回子ども生活実態基本調査」 Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2009年8～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生13,797人（うち中学生3,917人）。調査方法は学校通しによる自記式質問紙調査

まとめ

自ら設定した前向きな学習動機が 学習意欲につながる

◎手間が少ない方法でコツコツ勉強

近年、子どもたちの授業態度はまじめになってきているようだ。復習を中心に、毎日コツコツ勉強する子どもが増加している（P.20 ①）。一方、辞書を引いたり、図鑑などを使って調べたりといった、比較的手間がかかる学習方法を敬遠する傾向が見られる（P.20 ②）。

◎なぜ勉強するのか、の動機付けから

中学生になると、学習に関する悩みが増加する（P.21 ③）。背景には、思春期に入ることや、授業の進度が速く内容も難しくなること、部活動などで生活が大きく変化することなどがあると考えられる。そうした中、学習意欲が前向きで、家庭学習習慣が身に付いている子どもの方が、成績が高いことは明らかだ（P.21 ④）。学力向上のためには、まず、意欲的・自立的に学習に向かうための動機を、子ども自身が持つことが大切と言える。

◎成績に結び付く「受験」「友だち」の存在

学習意欲を高めるために、どのような動機付けをし、働き掛ければよいのだろうか。すべての子どもに共通する方策を見出すことは不可能だが、成績が良い生徒はどのような学習習慣や学習動機を持っているかを分析することは、一つのヒントになるだろう。

今回紹介した調査結果の中では、成績の良い生徒は、知識・理解が深まること自体を学習の動機として挙げる比率が高い（P.22 ⑤）。加えて、進学希望や、ライバルでもある友だちの存在も、学習に向かい、成績を上げる動機としての影響が大きいようだ。

中学生になると自分を客観視出来るようになり、自分がしたことや伸びしろを客観的に把握し、改善できるようになる。学校での指導においても、小さなことでもよいから子ども自らの意思で目標を設定し、成功体験を積み上げて学習意欲へと結び付ける指導が、今後ますます求められるだろう。

課題

に

フォーカス

職場体験を

より効果的な

実践にするためには

キャリア教育の中心的な活動として、多くの中学校が職場体験を実施している。職場体験を「過性のイベントに終わらせずに、より効果的な取り組みとするにはどのような工夫があるのかを紹介する。

現状

さまざまな課題がある中で 手間と時間を掛けて職場体験を実施

全日本中学校長会教育研究部の調査によると、職場体験は2日以上で実施している学校が多く(図1)、実施上の課題には「受け入れ事業所数の拡大の方法」と「受け入れ事業所の業種の多様化」が上位に挙げられた(図2)。学校規模別で見ると、規模が大きいほど「受け入れ事業所数」

が課題になり、規模が小さいほど「業種の多様化」が課題という傾向にある。職場体験は、事業所の協力なくしては実施出来ない。地域の理解を得ることが重要になる。

一方、進路指導を行う上での担任の悩みは、「保護者の進路指導に対する期待が進路先の選択やその合格可

能性に偏っている」が4割台で最も多く、次いで「生徒の進路意識や進路選択態度に望ましい変容が見られない」「進路学習を実施する十分な時間が確保できない」が25%を超えている(図3)。

このように、さまざまな課題がある中で、多くの中学校が手間と時間

を掛けて職場体験を実施しているのが現状のようだ。そこで、今回は、5日間の職場体験を中心としたキャリア教育で、生徒の職業観、就労観の育成だけでなく、生徒に学ぶことの意味を考えさせ、学習意欲の向上にも効果を上げている宮城県仙台市立寺岡中学校の取り組みを紹介する。

図2 「職場体験活動」実施上の検討課題

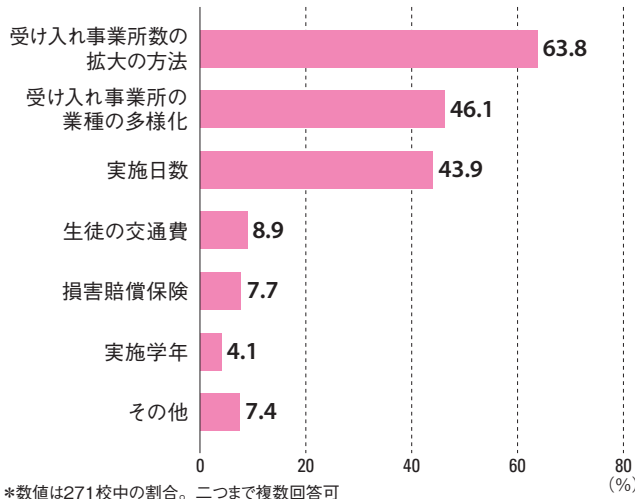


図1 「職場体験活動」の実施日数

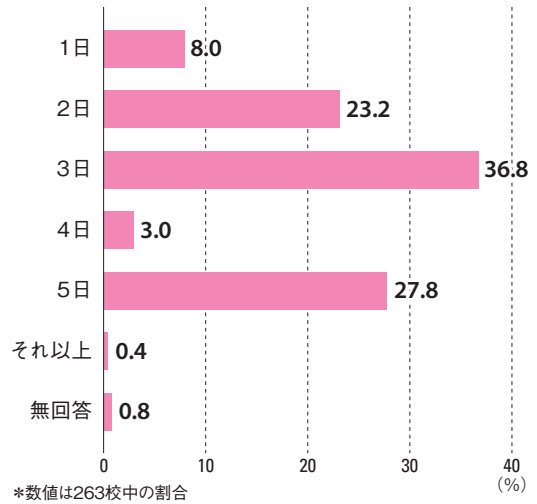
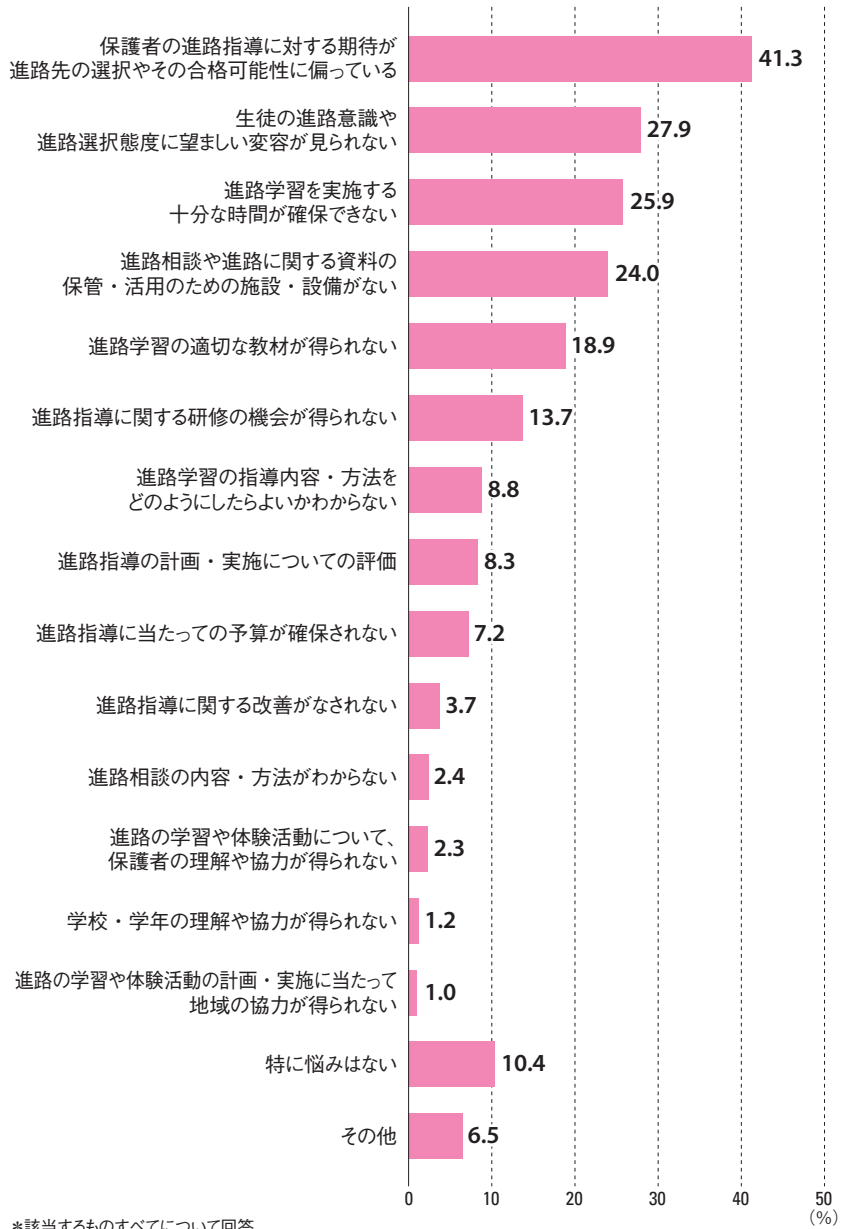


図3 学級担任が進路指導を行う上での悩み



出典

図1・2：「平成20年度調査研究報告書—新しい時代に求められる学校づくりの調査研究」全日本中学校長会教育研究部

図3：「キャリア教育の推進のための中学校進路指導の現状と課題—中学校における進路指導に関する総合的実態調査報告書から—」（2005年調査）財団法人日本進路指導協会

学校事例

「つながり」を意識した職場体験が 学習意欲の向上に結び付く

宮城県仙台市立寺岡中学校

3年間、一貫した課題を設け 職業観の変化を追わせる

仙台市立寺岡中学校は、2005年度に、市内で最も早く、2年生における5日間の職場体験を中心としたキャリア教育の取り組みを始めた。初年度は受け入れ先の確保に難航したが、試行錯誤を繰り返しながらノウハウを蓄積。5年目を迎えた09年度までに、3年間一貫・教科間連携を特色とするプログラムをつくり上げた。職場体験を「一過性のイベント」に終わらせずに実りあるキャリア教育を実践し、生徒の進路に対する目的意識と共に学習意欲が高まるという成果を上げている。

同校のキャリア教育の目的は、「職

業について知る」とどまらず、「働くとはどういうことか、そしてその意義・目的は何かを考える」ことにある。取り組みの柱は、1年生の「職場訪問」、2年生の「農業体験」「職場体験」、3年生の「達人訪問」と3年間のまとめとなる「キャリア教育発表会」である(図1)。

特徴は、各学年の取り組みにつながりを持たせていることだ。例えば、ある学年では、「働くことの喜び/どうして働いているのか/中学校の時に身に付けておいた方がよいものは何か/仕事へのこだわりとは」という四つの質問を、3年間を通じて訪問・体験学習を行う度に投げ掛けた。1年生の時にした質問を2、3年生の時にも投げ掛けることによって、さまざまな大人の多様な考え方に触れ

ることが出来ると同時に、3年間で変化する自分自身にも気付くことが出来る。

「本校のキャリア教育は2年生の職場体験が中心ですが、1、3年生の取り組みとつなげることで、職場体験をより意味のあるものにしていきます」と藤森幸校長は話す。

柱となる活動がある一方で、具体的な手法は各学年の学年主任に任せられている。毎年、年度初めに、学年主任を中心として、生徒の実態を踏まえた各学年の方針を検討し、共有している。例えば、前述の「3年間共通の質問」はある学年でのみ実施されたもので、別の学年では3年間を通して、働く意義について「生活のため/社会のため/自分の生きがい/義務を果たす」という四つの

仙台市立寺岡中学校

1983(昭和58)年開校。仙台市北西部の新興住宅地に位置する。2005年度、文部科学省のキャリア教育実践プロジェクトに指定。08年度、キャリア教育に対し文部科学大臣表彰。

校長	藤森 幸先生
所在地	〒981-3204 宮城県仙台市泉区寺岡2-13-1
生徒数	327人
学級数	10学級
TEL	022-378-0931
URL	http://www.sendai-c.ed.jp/~tera-jh/



仙台市立寺岡中学校校長
藤森 幸
Fujimori Yuki



仙台市立寺岡中学校
3学年主任
吉田知彦
Yoshida Tomohiko

観点から考えた（P.28 図2）。

キャリア教育の総まとめとして3年生で行うキャリア教育発表会の形式も、各学年の方針により異なる。ある学年では、3年生全体でパネルディスカッションを行い、別の年は学級内でデイベートを行った。

「すべてを固定のプログラムとせず、教師の裁量に任せる部分を残すことで、学年の実態に応じて柔軟に対応出来る上に、先生自身のやりがいにもつながります」と藤森校長は説明する。

「毎年、生徒の実態は変わるので、プログラムを厳密に固定してしまうのは良くありません。教師にとって、前年度の踏襲では、それぞれの取り組みの意義が薄れていき、形骸化してしまうことがあります。教師自身が楽しく取り組みなければ、内容はなかなか深まらないでしょう。先生方の『思い』は出来るだけ尊重しています」（藤森校長）

課題

に
フォーカス

職場体験を

より効果的な

実践にするためには

もともと、毎年必ず「前年とは違うことを」とは求めている。学年主任がそれで良いと判断すれば、前年と同じでも問題はないというスタンスである。しかし、どの先生も「より良いものを」という思いから、毎年工夫を重ねているという。

「各学年の『思い』が、ぶれずうまくいっているのは、年度当初に教師全員で『すべての教育活動を通して生徒に身に付けさせたい力』を一つの活動ごとに確認し、共通理解をしているからだと思います。取り組みの柱と目標を決めて、後は学年に任せるというのがポイントです」（藤森校長）

図1 寺岡中学校のキャリア教育の柱

1年生

● 職場訪問（1日）

働くことなどについて事前学習をした上で、3～6時間くらい仕事を体験し、働く意味について事業所でインタビュー。感じたことをまとめる

2年生

● 農業体験（2泊3日の野外活動）

2日目には農業を体験。その後、民泊

● 職場体験

「総合的な学習の時間」を使い、年50時間で実施（事前準備12時間、職場勤務5日間で30時間、事後学習8時間）。事業所は、教師による面接と生徒の希望を踏まえて決定。事前に事業所に履歴書を提出する。職場勤務中は自宅から直接職場に行く。体験後に発表会をして、考えや感じたことを共有する

3年生

● 達人訪問

修学旅行の際、教師が選んだ訪問先に自らアポイントを取って訪問する

● キャリア教育発表会

働くことについての3年間のまとめ

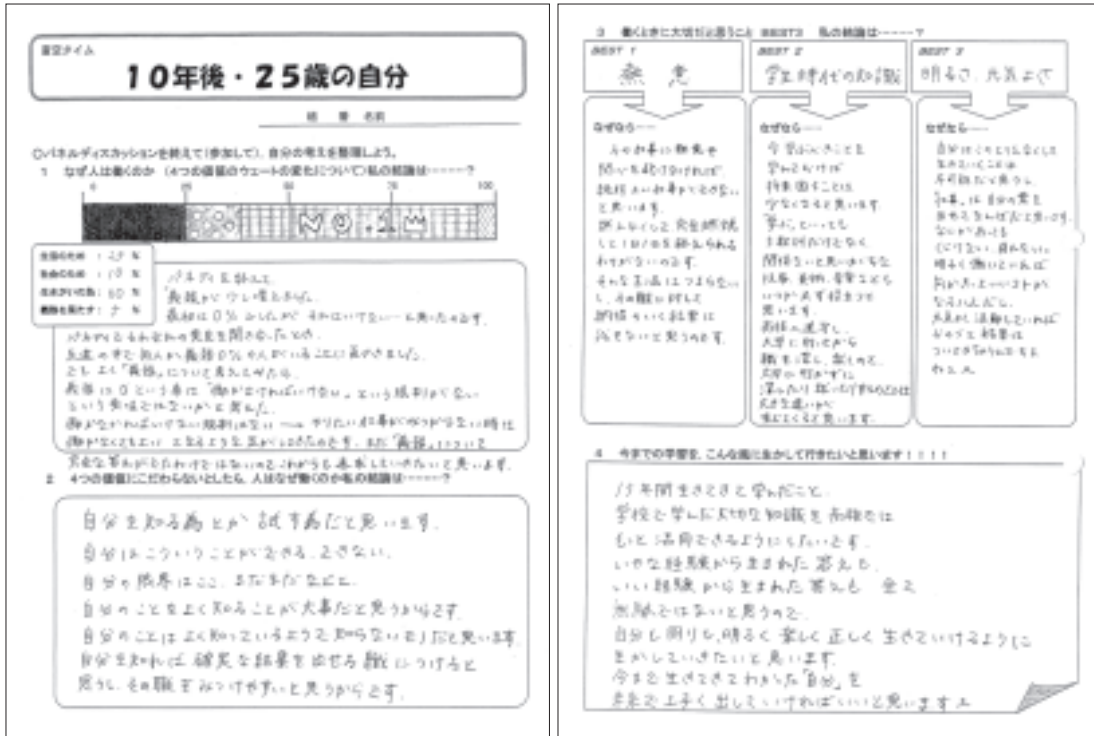
取り組みの柱は各学年共通。取り組み同士のつなげ方や自身の工夫などは、各学年が生徒の実態に応じて柔軟に対応している

5日間だからこそ体験出来る仕事の厳しさと面白さ

2年生で行う5日間の職場体験は、5年前に始めた。前例の無い取り組みであるだけに、協力してくれる事業所探しには苦労したという。「5日間という期間に、『前例が無い』『業務に差し障りが出る』などの難色を示す事業所が大半でした。教師が自ら事業所を訪れて、更に保護者の協力を得ながら、さまざまな企業にあたりました。初年度はなかなか数が集まらず、2、3日間の受け入れならば可能という事業所を組み合

わせて、とにかく生徒が5日間の職場体験をすることにこだわりました」と、3学年主任の吉田知彦先生は当時を振り返る。「5日間という期間には、生徒にとって大きな意味があります。初日と2日目はお客さん扱いですが、3日目になると仕事を覚えてきます。しかし、4日目に出てくる疲れを乗り越えて、初めて成長出来るのです。また、一通り仕事を覚えたからこそ、工夫してみようと考えたり、事業所の方に『任される』『頼まれる』ようになったりしてきます。その体験が達成感や自信につながるのです」（藤森校長）

今では職場体験への理解が広がり、受け入れ先はほぼ定着した。事業所に礼状やキャリア教育発表会の案内などを送る際に、次年度の受け入れについても書き添えて、事前にお願いをしている。このようにして、現在はホテルや大学生協など約40の事業所から協力を得ている。職場体験を行うのは10月だ。9月に入ると、掲示板に教師が作った「求人票」が張り出される。生徒はそれを見て希望を出す、必ずしも希望通りの事業所で職場体験が出来るわ



働く意義について、3年間を通して「生活のため／社会のため／生きがいのため／義務を果たす」という4つの観点から考えてきた学年によるまとめのパネルディスカッション後のシート。司会者、パネラーを始め、参加した生徒全員が、ディスカッションを通じて自分の意見がどう変化したかを考察した

けではない。学年の教師による面接を経て、最終的に決まる。ここで体験先が決まらなかった生徒は、残っ

た事業所からもう一度選り直し、再度面接を受ける。「生徒には、必ずしも希望がかなう

わけではないと、事前学習で知らせています。実社会でも、自分のしたい仕事が出来るとは限りません。それをここでも体験するのです。求人票を見て自分で体験先を選び、面接を受けるという過程は、『なぜその仕事をしたのか』『何のために働くのか』をじっくり考える機会になります」(吉田先生)

生徒は、興味のある分野や自分が知っている部分しか関心を持たない傾向がある。「分らないところには行きたくない」という場合がほとんどだ。ところが、実際に行ってみると、たくさんの気付きがある。世界を広げるために、あえて希望していない職場に送り出す意味は大きいという。逆に、希望した職場に行ったものの大きなギャップを感じる生徒もいる。これもまた大きな学びになる。

09年度の職場体験発表会には、2年生だけでなく、1、3年生、そして校区内の小学6年生も招待した。6年生と1年生は、これから体験することへの心構えが出来る。3年生は、経験者の視点から振り返ると同時に、2年生にアドバイスが出来る。これにより、縦の連携が強化され、より実効的なキャリア教育になる。

ポスター制作や道徳の授業で学習の大切さに気付かせる

職場体験での学びを定着させるために、09年度には2年生の職場体験後に各自が派遣先の事業所をアピールするポスターを作成した。キャッチコピーを考え、イラストを描いたり、許可を得て事業所のウェブサイトに写真を取り込んだりと工夫を凝らした。こうしたポスターは、生徒が派遣先の業務内容を実感を伴って理解していないと作れない。更に、キャッチコピーは国語、イラストは美術、写真などは技術・家庭で学んだことを生かせる。授業が実生活に生かせることを実感出来る場となった。

道徳との連携にも熱心に取り組む。09年度は、職場体験発表会の直後に「何のために学習するのか」をテーマに、次のような流れで授業を行った。

①授業の初めに、学習の意味についてそれぞれの考えを発表し合う。自分の能力を高めるため、社会に貢献するため、自分を鍛えるため、希望の職業に就くため、生活のため、人としての魅力を高めるためなど、さ

さまざまな意見が出された。

②将来、お笑い芸人になりたいという「太郎」が、親に「勉強する意味」を聞く場面を想定し、太郎の親になったつもりでその疑問に答える「手紙」を書かせた。生徒は、先の発表も参考にしながら、改めてじっくり考え、丁寧に手紙を書いた(図3)。

③最後に、保護者から生徒に向けて「なぜ学習をするのか」について事前

に書いてもらっていた手紙を手渡した。
「自分の親の考えと共に、親が忙しい合間を縫って書いてくれた手紙に、温かい愛情を感じ取っている様子がうかがえました。太郎への手紙を書いた時の自分の思いと、親の思いが重なり、素直に『頑張って勉強しよう』という気持ちになれたと思います」(藤森校長)

「道徳とつなげたことで、職場体験の価値が高まりました。大人の世界に触れ、少し大人になった気持ちに

課題

フォーカス

職場体験を

より効果的な

実践にするためには

なった直後に、生徒に『親になったつもり』で学習の必要性について考えさせる。別のタイミングで同じことをさせるより、はるかに考えは深まったと思います」(吉田先生)

「学習の必要性」に気付く

職場体験後の生徒を対象としたアンケートで最も多かった感想は、「学習の必要性に気付いた」であった。多くの生徒が「何のために学習するのか」という問いに自分なりの答えを見いだしたと言える。事業所での大人との会話も有効だと、吉田先生は説明する。

「事業所の人との会話の端々には、『今のうちしか勉強出来ないぞ』という言葉が出てきます。生徒は、家庭でも同じようなことを言われているとは思いますが、保護者でも教師でもなく、社会で働く大人から言われた言葉は説得力が違います」(吉田先生)

職場体験を始めてから、希望の進路を実現する生徒が増えている。藤森校長は、「学習の意味を理解せずに

点数に追われるより、生徒自身が将来のことを考えられるように変わることが、学習意欲を高め、ひいては学力向上につながっていくのではと実感しています」と話す。

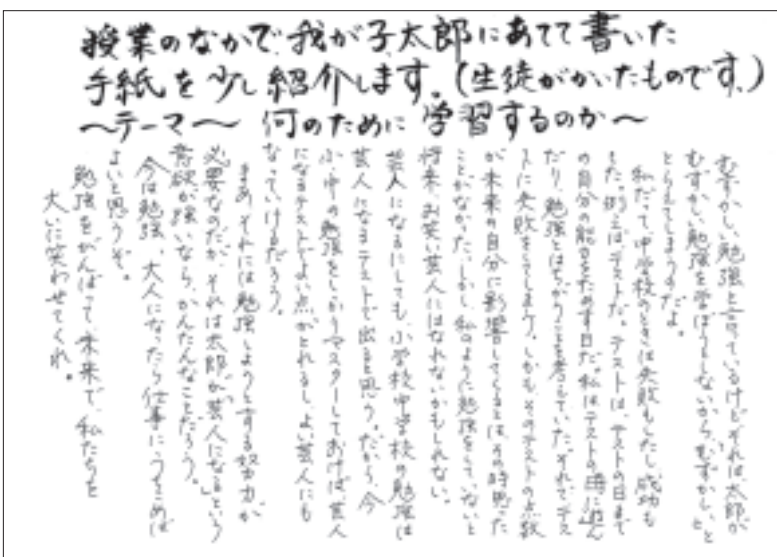
課題は、校区の小学校との連携だ。現在、校区の小学校でも職場訪問のような取り組みを行っているが、指導内容については連携出来ていない。いわゆる「中1ギャップ」に対応す

るための「体験授業」「体験入部」を行い、職場体験発表会に小学6年生を招待している。しかし、学習面での連続性も考えるべきではないか、と藤森校長は感じている。

もう一つは、地域との連携だ。職場体験のノウハウが蓄積されてきた今、受け入れ先は出来るだけ地元企業に依頼したいと考えている。同校は新興住宅地にあ

るため、もともと企業や商店が少ない上、地域とのつながりが希薄になりがちだ。地域社会の重要性を実感させるためにも、地元企業での体験を積ませたいと考えている。少しずつだが受け入れ事業所は近隣地域でも増え、可能性は見えてきている。同校では、今後も試行錯誤を続け、キャリア教育を更に発展させていく考えだ。

図3 道徳「何のために学習するのか」で生徒が太郎にあてて書いた手紙(「学級だより」から)



京都府 長岡京市立長岡中学校

教師の手の内を明かした 「学習ガイド」で学習意欲を育む

長岡京市立長岡中学校では、「勉強をしないと分かっていても出来ない」という生徒を支援するために、単元単位での「学習ガイド」を作成した。学習のめあてや自己評価のポイント、宿題などを事前に示し、自ら学ぶ力の育成を図っている。

計画→遂行→自己評価の サイクルでやる気を引き出す

長岡中学校は、生徒の自主学習を支援するための「学習ガイド」を、文部科学省「学力向上拠点形成事業」の指定を受けた2005年度から作成している。生徒の意識や実態を把握するためのアンケートを行ったところ、「勉強の大切さは分かっている、勉強しないことを反省しつつ、それでも勉強しない」という生徒像が見えたことがきっかけだ。

「勉強をする気はあるけれども、

出来ないという生徒を支援したいという思いがありました」と、教務主任の湯浅修一先生は説明する。

開発にあたっては、国立教育政策研究所の山森光陽研究員の指導をおき、理論的基盤として「自己制御学習モデル」を用いることにした。学習に取り組む過程を「計画」「遂行」「自己評価」の循環過程としてとらえたもので(図1)、これを学校教育に当てはめて、次のような指導のポイントへと発展させた。各教科はそのポイントを踏まえ、教科特性や生徒の実態を考慮に入れた上

で、教科別に「学習ガイド」を作成した。

指導のポイント(同校「研究概要」より引用)

●計画の段階

- ①学習内容に関連した目標を持たせる
- ②どのように学習を進めればよいかを示す

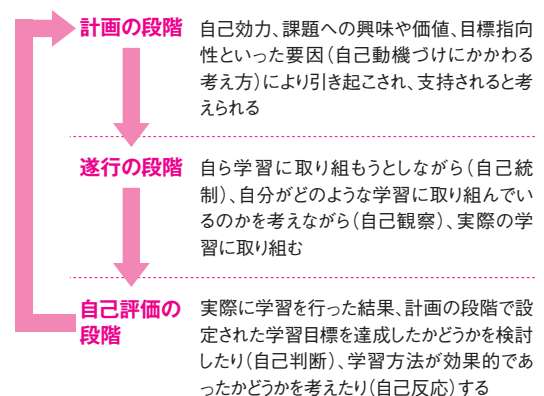
●遂行の段階

- ③自分で学習を進められるようにする
- ④自分で適宜学習状況をふり返ることができるようにする

●自己評価の段階

- ⑤学習内容に関連した形での自己評価ができるようにする

図1 自己制御学習モデル*



「学習ガイド」には、単元のねらいや学習内容、自己評価や「おすめの宿題」が記されている。分量は一単元当たりA4の用紙で2〜3枚。各単元の最初の授業で配布し、専用ファイルにとじたりノートに張ったりして、各自が授業や家庭学習の「道しるべ」にする(図2)。

学習のめあてが明示されているので、その日の授業で何が重要か一目瞭然となり、「おすめの宿題」を参考に、家でどのような勉強をすれば良いのかも分かる。

「この単元ではこんな力を身に付けさせる↓そのために教師はこんな指導を行う↓それを理解するために

*図1は次の文献を参考に作図: Zimmerman, B. J. (1998). Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: An analysis of exemplary instructional models. In Schunk, D. H. & Zimmerman, B. J. (Eds.), Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice. New York, NY, US: Guilford Publications. pp. 1-19.



英語

社会

どの教科も、単元(授業)のねらい/その学習方法/自己評価ポイント/宿題(または確認問題)が明示されている。教科により各項目の示し方は工夫されている。例えば、社会は「ねらい」を先に提示するとその日の授業の答えになってしまう場合が多いため、ガイドは要点のチェックが中心になる



「学習ガイド」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/c9441/>

有効な勉強法はこれ↓具体的にこんな問題を解くと力が付く、といった具合に、ある意味で教師の指導の「手の内」を生徒に明示したわけです」(湯浅先生)

とはいえ、現在の形になるまでには試行錯誤があった。作成初年度は、指導のポイントを絞りきれなかったため、内容が多く細かくなり、生徒に不評だった。そこで2年目からは「使いやすいガイド」を目指し、生徒の意見や教科特性に更に配慮して要素を精選してきた。

作成開始から5年目となる09年度は、盛り込む情報量の適量が見えてきた。今後もより良い内容を目指し、試行錯誤を続けていく。

単元単位で考える教材開発は教師の力量向上にも結び付く

「学習ガイド」は生徒に大きな変化をもたらした。導入前後の生徒の意識変化を見るためにアンケートを実施したところ、導入後に成績の上があった生徒の多くが「学習ガイド」によって「どのよう

SCHOOL DATA

長岡京市立長岡中学校

◎1955(昭和30)年開校。2005年度から3年間、文部科学省「学力向上拠点形成事業」の指定を受け、「自ら学ぶ意欲」を育てる教材として「学習ガイド」の開発に着手。08年度からはこの研究を継承・発展させた「自ら学ぶ力及び活用に関わる力の育成を目指した『単元パッケージ』の開発」(京都府教育委員会他指定)に取り組む。

校長 橋本政道先生

生徒数 503人

学級数 16(うち特別支援学級2)

所在地 〒617-0824

京都府長岡京市天神4丁目5-1

TEL 075-951-1171

URL <http://www.edu.city.nagaokakyo.kyoto.jp/nagaoka-j/>



長岡京市立長岡中学校

湯浅修一

Yuasa Shuichi

教務主任・研究主任
英語科担当

いのが分かった」「自分の学習内容の理解度を把握出来た」と実感していた。予習・復習以外の家庭学習をする生徒も増え、成績が伸びた生徒の中でも成績下位層だった生徒が、「学習ガイド」により強い有用感を持つていくことが分かった。

授業の進め方も大きく変わった。「『学習ガイド』作成のために、今まで以上に自分の教科についてじっくり検証しました。事前に単元全体を考えますから、授業のイメージも出来上がり、ガイドを軸に見通しを持った計画的な授業を展開出来るようになった」(湯浅先生)

07年度には、ペアやグループでの学び合いの機会を取り入れることで学習意欲の育成を図る「協同的な学

び」の研究が始まった。更に、08年度からは、活用力を育むため、レポートや新聞などの作品やプレゼンテーションなどを評価する「パフォーマンス課題」を加えた「単元指導計画」の開発に着手した。

「『学習ガイド』の作成によって単元単位で考える素地が出来ていたため、今回の研究開発にはスムーズに取り組みました。結果的に、指導力の向上にもつながる取り組みだったと思います」(湯浅先生)

「学習ガイド」は、機械的に学習量を課す問題集ではなく、心構えを説くだけの手引きでもない。教師の手の内を適切に「種明かし」することによって生徒の意欲を引き出すツールなのだ。

テーマ：もし1年間、教師以外の職業に就くとしたら？

今回は、1年間だけ就いてみたい職業を理由と共に書いていただきました。教職を離れたとしても、人とかかわる職業を希望する声が多かったのが印象的でした。

◎農業や林業など、社会科の教師として実体験が無いまま授業をしていた職業。あるいは、カウンセラーやスクールソーシャルワーカーのように、少し離れた距離から生徒に接することが出来る職業に就いてみたいです。

[大阪府／摂陽中学校／山口昌孝]

◎医者。人を助けたいからです。

[北海道／H中学校／K・O]

◎放送関係。現地に赴き、その地域の人たちとかかわることによって、思いや願いを知りたいし、感じたいと思います。

[愛知県／T中学校／M・S]

◎修学旅行の感動を味わうことが出来る、旅行会社の添乗員になりたいです。

[大阪府／十三中学校／上田 明]

◎文部科学省の職員です。1年では足りないと思いますが、全国的な視野で教育に関する国政や全国の教育委員会等の動向を見たいです。

[北海道／北海道教育大学附属函館中学校／黒田 諭]

◎政治家、またはタクシーの運転手です。世間の人たちといろいろな話をしてみたいです。

[鹿児島県／K中学校／A・S]

◎まちづくりにかかわる雑誌の記者です。さまざまな場面で活動している人を知り、そんな人々の情報を発信できればうれしいです。人、自然、社会などさまざまな資源を発掘して、それらをリンクした情報を10代からシニアにまで提供できればと思います。教職という狭い世界とは違う視点で社会を見たいです。

[福岡県／白光中学校／杉野浩二]

◎民間企業です。教師以外の職業であれば、どんな業種でも体験してみたいです。

[富山県／T中学校／M・O]

◎市立図書館の司書。好きな本と出会い、幼児へ読み聞かせをするなど、ゆっくりじっくり本と向き合う時間が欲しいからです。

[鹿児島県／S中学校／M・S]

◎落語家。人を笑わせて幸せにしたいです。

[千葉県／H中学校／Y・K]

◎教材制作の会社で、授業に使用する学習教材を作成する仕事をしてみたいです。今までも教材を作成してきましたが、大きなものは作成に数カ月を要することもあり、実験観察のタイミングに間に合わず、翌年使用したこともありました。授業者の立場に立って作成したいと思っています。

[群馬県／広沢中学校／浦澤一雄]

◎矯正教育の在り方に関心があるので、少年院の教官になってみたいです。

[宮城県／I中学校／S・A]

◎野菜、果物栽培の農園主です。生まれてこの方、ずっと都会暮らしだったので、田舎でのんびりと農産物を育ててみたいです。

[北海道／I中学校／Y・M]

◎飲食業を営みたい。自分の作る食事を通して、人との触れ合いが出来るからです。

[沖縄県／K中学校／A・M]

◎ホテルマン。接遇の仕方や、苦情対応のヒントを学びたいです。

[栃木県／S中学校／A・W]

◎海外に移住して、現地の観光ガイドをし、広い視野を持ちたいです。その経験を後の生活に生かしたいと思っています。

[長崎県／K中学校／H・H]

1年間、たくさんのご意見をお寄せいただき、ありがとうございました。

編集後記

研究授業に関する取材の最中、対応してくださった先生が「私たちの合いことばは『どんと来い!』なんですよ」とおっしゃっていたのが印象的でした。想定外の課題が生じた時などに、周囲の先生方と一緒に、また、ご自身にも言い聞かせるように言うそうです。大変心強く感じると同時に、本特集が少しでもそうした先生方のお役に立てば幸いです。(久保木)

VIEW21 中学版 2009 Vol.4

2010年2月18日発行／通巻304号

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 大日本印刷(株)
 印刷製本 (有)ペンダコ
 編集協力 柴崎朋実、二宮良太、山口慎治
 執筆協力 荒川 潤、川上一生
 撮影協力
 イラスト協力 幸剛

◎お問い合わせ先
 VIEW21編集部
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
 東京オペラシティタワー22階
 電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010